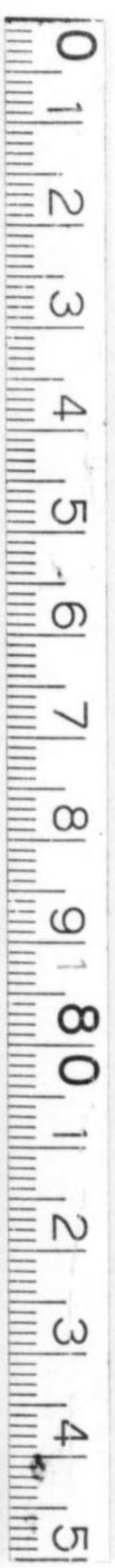


始





特 232  
531



廣島文理科  
大學教授  
加藤盛一  
校訂  
並譯註

孝經啓蒙

東京 天  
晨堂 刊  
行







孝

者簡是太極之殊稱。放之彌六合。卷之藏于密。人々具足。物々完成。然人不知。固有於己。是目聖人。目愛敬。示其實。目不驕。垂戒。驕與孝反。驕則不孝。不驕則孝德呈露。故有一毫滿心。則至德昏。而爲不孝之子也。爲人子者。宜知所戒。

藤樹先生眞筆孝字釋

(愛媛縣大洲町 井關良三氏藏)

昭和十六年六月初めて發見、藤樹先生全集再刊本にも載せ得ざりしもの、全集雜著中孝八條のところ追録すべし。孝を以て太極の殊稱とし、六合に彌り密に藏る、即ち時間空間を超越する存在なりとす。こゝに先生の太虚説、孝の形而上學を窺ふべし。而して驕の一字を以て孝の發露を妨ぐる第一の者とするところ、先生獨特の體察に係る。蓋し孝經の「上に居て驕らず」、論語の「周公の才の美あるも驕り且つ吝ならしむれば觀るに足らず」、大學の「驕泰以て之を失ふ」等より工夫せられたるものならんか。







## 解題

孝經啓蒙は藤樹先生首著の一にして、三十四歳より起筆せられ三十五歳に成りしものなり。而して今日現存する孝經啓蒙に大凡二種の別あり。一は初稿本にして、一は定稿本なり。藤樹先生全集初版發行に際しては、内容の簡略なるものを初稿本とし、内容の比較的詳密なるものを定稿本と決して、二種共に之を收載したり。然るに先生の著作は晩年に至るに従ひ、最簡至要の形式を取らるゝを知るに及びて、前の決定に動搖を感ずるに至れり。特に先生四十一歳の夏、門人戸田孫助正度が伊豫に歸國するに際し親授せられたる孝經啓蒙眞筆本を新に發見したるに、之は内容の簡略なるものに屬す。且つ其の筆蹟も亦親授中の他の書翰集等と共に老筆に相違なく、前年著作當時筆寫しおきたるものを、戸田氏歸去に臨みて之を筐底より抽出して與へられたりとは考へられざるものあり。一方内容の詳密なる



ものは、材料は多けれども必ずしも定稿なりとも斷じ難く、且つ字句の如きは後人の修正に屬するかを疑はしむ。今兩者傳來の主なるものを見るに

## 一、内容の稍詳密なるもの

(一) 京都帝國大學圖書館藏有、洛下眞裕謹書本

(二) 全集篠原氏の底本となしたる所謂新本

(三) 前者と對立する所謂舊本

## 二、内容の比較的簡約なるもの

(一) 藤樹書院藏有、門人敬寫本

(二) 全書岡田氏本

(三) 湖東門人益田家傳來本、孝經句解

(四) 眞蹟戸田氏本

等なり。孝經句解と眞蹟戸田氏本とは、何れも全集發行以後に發見したるもの、特に戸田氏本は昨年に入りて初めて之あるを知りしものなり。但し孝經句解と戸田氏本とは殆ど全く同一にして、而も益田氏の筆寫は直接戸

田氏本より取材したるに非ざる證左あり。必ず別に底本となれるもの存在せしを想はしむ。而して此の兩本の特徴は書院寫本並に岡田氏本が孝經正文を句毎に摘記すること、恰も朱文公定古文孝經宋の朱申註に似たるものあるに反し、此の兩本は孝經の正文を相當連續して引用し、其の下に啓蒙の文を記述し行くこと、恰も朱文公刊誤元の董鼎注の例に似たるものあり、特に此の點のみは篠原氏本其他と一致すること是なり。尙内容の稍詳密なる部門中、眞裕本は謹書と題せられつゝ、誤寫甚だ多く、又篠原氏本等の書は何れも板行本に屬するに相對し、内容の比較的簡約なる書院寫本以下は、書院若くは門人の家に傳來したる由緒確實なるもののみにして、最も信をおくに足ると共に、岡田氏本の如きは其の筆寫嚴正にして、眞蹟戸田氏本に在りても時に誤脱なきこと能はざるに比し、極めて徵を取るに足るものあり。由つて今は主として此等確實なる材料を比照對校して、新に孝經啓蒙を決定し、名づけて定本といふ。固より一字として編者に於て猥り



に加除することは之を避け、謹みて訂正の筆を施したる所は特に之を明記しておく。

孝經啓蒙は、先づ孝經注疏を精讀して之を根幹資料となし、且つ明人江元祚の集成に係れる古今の孝經注釋書を多く引用しつゝ、四書五經を經とし、又眞摯なる體察を緯とし、以て聖經の眞意を十分に發揮し、そこに先生獨特の孝の形而上學を展開せられたるもの、別して其の取材の方法巧妙を極むると同時に、古昔の禮制を明かにすることに努められたるは、先生の他の力作論語鄉黨啓蒙翼傳と共に尤も注意すべき點なりとす。又戸田氏本の如きは啓蒙の正文に詳密なる訓點の施さるゝあり。而して此の附點に際しても、父に事へ母に事へ兄に事ふるに比して、君上若くは天神地祇に對するときは、君に事へまつる、上に事へまつる等必ず敬語を附せらるゝ、深甚の用意あるを知るべく、孝徳の闡明に徹底せらるゝと同時に、又夙に我が國體の明徴に力められたるは、彼の大神宮に詣拜しては皇國臣民の自覺を敍べ、又

小川の社頭に額づきては、天下太平、大道興隆、家皆孝子、國皆忠臣を祈念せられしと共に特筆すべき要事たり。之を要するに忠孝の大義を宣揚したる日本國民必讀の好著にして、孝經疏證の著者鈴木柔嘉が和漢古今の孝經注釋書中翹楚として推賞措かざるもの宜なりと謂ふ可し。

皇紀二千六百有一年七月下泮

廣島文理科大學教育學研究室に於て 加藤盛一謹識



詠藤樹書院老藤

京都帝國大學  
名譽教授 文學博士 豹軒 鈴木虎雄

孝德至靈通鬼神。 一誠終始覺斯民。

參天院外蒼藤樹。 標得江州大聖人。

訪藤樹書院

同 上

紫藤花靜夏風清。 仰止湖堂孝德明。

皇國英豪無算數。 聖人稱獨在先生。

凡 例

- 一、孝經の正文並に啓蒙は、主として眞蹟戸田氏本、益田氏本に従ひ、之に岡田氏本、書院寫本を對校して、其の宜しきを定む。
- 一、編首に戸田氏本の例に倣ひ、明の江元祚の作、全孝圖說、全孝心法、誦經威儀を附載す。
- 一、國譯中に於ける孝經正文の章次は姑く古文孝經の分截に従ふ。但し先生が必ずしも此の章次に従はれたるに非ざること、は、父母生續の章第十一と孝優劣の章第十二とを連引せられたるに因つても之を知るを得れども、今は理解に便するため之を附記す。
- 一、下欄に國譯を附したるは、戸田氏本、益田氏本、岡田氏本の附點の大要を髣髴せしむると共に、此の書の普及を期し、且つ一般讀書子讀解の一助に資せんとする編者の婆心に外ならず。



- 一、編輯上の手續を明示すると同時に、語句の解釋並に出典の大要を知らしめんために脚註を附す。
- 一、藤樹先生全集第一冊孝經啓蒙初稿本、定稿本並に拙稿藤樹學源流考を併看せらるべし。

以上

全孝圖說  
全孝圖



此の全孝圖說、全孝心法、誦經成儀は並に江元祚の自作に屬し、江氏の編輯したる孝經大全中に在り。眞蹟戸田氏本孝經啓蒙の卷首に先生躬から附載せらる。啓蒙の本文には先生の訓點附せらるれども、此の三文には句讀訓點共に無し、今句讀を附す。



孝字從老省從子。子在老傍。抗而不順。非孝也。老在子下。逆而不順。非孝也。老上子下。斯象形矣。規者大虛也。規中者其孕也。約以從老從子之象。大虛爲老。能孳萌爲子。大虛爲老。三才萬物爲子。乾爲老。坤順承爲子。乾坤爲老。六子爲子。乾坤爲老。日月五行民物爲子。日爲老。月受光爲子。日月爲老。五行民物爲子。五行生我爲老。我生爲子。山祖脈爲老。胎育爲子。川源爲老。委爲子。五行爲老。渾敦氏爲子。渾敦氏爲老。人爲子。二氏父母爲老。二氏爲子。兆人父母爲老。兆人爲子。四夷父

孝の字は老の省けるに従ひ、子に從ふ。子老の傍にあり、抗して順はざるは孝に非ず。老子の下にあり、逆つて順はざるは孝に非ず。老は上に子は下にあり、これ象形なり。規は大虛なり。規の中は其の孕るなり。約するに老に従ひ子に従ふ象を以てす。大虚を老と爲し能く孳萌するを子と爲す。大虚を老と爲し三才萬物を子と爲す。乾を老と爲し坤の順承を子と爲す。乾坤を老と爲し、六子を子と爲す。乾坤を老と爲し日月五行民物を子と爲す。日を老と爲し月光を受くるを子と爲す。日月を老と爲し五行民物を子と爲す。五行我を生むを老と爲し我が生るゝを子と爲す。山の祖脈を老と爲し胎育を子となす。川源を老と爲し委を子と爲す。五行を老と爲し渾敦氏を子と爲す。渾敦氏を老と爲し人を子と爲す。二氏の父母を老と爲し二氏を子と爲す。兆人の父母を老と爲し兆人を子と爲す。四夷の父

以下三篇は先生の孝説を解説するに必要なるを以て戸田氏本に従つてこゝに掲ぐ。

規、圓形のかこひをさす。

孳萌、ひこばえめばえすること。

委は末流のこと。

渾敦氏、左傳文公十八年に帝鴻氏に不才子あり、凶徳を行ひ惡友と交る。天下の民之を渾敦といふ。二氏、釋氏と老子。

母爲老。四夷爲子。五等之貴者爲老。賤者爲子。禽獸草木各有牝牡雌雄。雖胎化不同。而生者爲老。受生者爲子。以老孚子。以子承老。無物非孝也。援神契曰。孝在混沌中。曾子同。夫孝推之後世。而無朝夕。無時非孝也。無物不有。無時暫停。以應規也。人言釋老超出大虚。不拜父母。大虚無外。復何可超。卽與同體。能不孳萌。而爲孝乎。

母を老と爲し四夷を子と爲す。五等の貴者を老と爲し賤者を子と爲す。禽獸草木各牝牡雌雄あり。胎化同じからずと雖も、而も生する者を老と爲し生を受くる者を子と爲す。老を以て子を孚み子を以て老に承く、物として孝に非ざるはなし。援神契に曰く孝は混沌の中にありと。曾子曰く夫れ孝は之を後世に移して朝夕なしと。時として孝に非ざるはなく、物として有らざるなく、時として暫くも停ることなく以て規に應ずるなり。人は言ふ釋老は大虚を超出して父母を拜せずと。大虚外なし。復何ぞ超ゆべけんや。卽ちともに體を同じくす。能く孳萌せずして孝と爲さんや。

援神契、孝經緯授神契をさす。曾子曰く云々、禮記祭義中の語。



全孝心法

人在氣中。如魚在水中。父母口鼻通天地之氣。子居母腹。母呼亦呼。母吸亦吸。一氣流通。已無間隔。何況那本靈本覺的。乘氣出入。又有甚麼界限處。可見此身不但是父母遺體也。是天地的遺體。又是大虛的遺體。保養遺體之法。不過馭氣攝靈一事。馭氣攝靈。不過愛敬二字。愛之極爲敬。敬之至爲齋。齋戒洗心。到得浩然之氣塞乎兩間。赫然之光照乎四表。方纔是個全孝。方纔叫做孝子。這是極平極易極庸極常的道理。如人目能視。耳能聽。只把做平易庸常。使一生盲聾的人

人の氣中に在るは魚の水中に在るが如し。父母の口鼻は天地の氣に通ず。子母の腹に居り、母呼すれば亦呼し、母吸するも亦吸す。一氣流通して已に間隔なし。何ぞ況や那の本靈本覺のもの氣に乗じて出入す。又甚麼の界限する處あらんや。見るべし此の身たゞにこれ父母の遺體なるのみならず、これ天地的の遺體なり。又これ大虚的の遺體なり。遺體を保養する法は氣を馭し靈を攝する一事に過ぎず。氣を馭し靈を攝するは愛敬の二字に過ぎず。愛の極を敬と爲し、敬の至を齋と爲す。齋戒し心を洗つて浩然の氣兩間に塞がり赫然の光四表を照らすに到り得て、方に纔にこれ個の全孝にして、方に纔に孝子と叫び做す。道はこれ極平極易、極庸極常の道理なり。人の目の能く視、耳の能く聽くが如し。只平易庸常を把り做して一生盲聾の

忽然得此。便大驚小恠誇張神異。然究竟來。只是個平易庸常。如何添得些子。且世上有五等人。孤子。義子。失怙之子。爲人後之子。與中貴人。他恨不得親事父母。殊不知此身既爲大虚天地的遺體。難道不是君父繼父繼母的遺體。昔日王祥輩。但只一味孝順繼母。就有許多靈感。豈是那繼母生下他來。至于孤子。有乾坤。有君師。有宗廟。隨在皆可盡孝。隨在皆有感通。這五等人。雖無父母。得事其實與在膝下一般。若肯依著這心法。行將去。何處不遇本生父母耶。

人をして忽然として此を得しむれば、便大驚小恠、神異を誇張せんも、然れども究竟し來れば、只これ個の平易庸常のみ、いかんぞ些子を添へ得んや。且世上に五等の人あり、孤子と義子と怙を失へる子と人の後たる子と中貴の人となり。他は親しく父母に事ふるを得ざるを恨む。殊に知らず、此の身既に大虚天地的の遺體たれば、これ君父繼父繼母的の遺體ならずといひ難きを。昔日王祥の輩たゞ只一味に繼母に孝順にして、就許多の靈感あり。豈これ那の繼母他を生じ下し來れるか。孤子に至りても乾坤あり、君師あり、宗廟あり。在るに隨ひて皆孝を盡すべし。在るに隨ひて皆感通あり。道の五等の人父母なしと雖も、事ふるを得ば、其の實膝下に在ると一般なり。若し肯て道の心法に依著して行ひ將て去らば、何處にか本生の父母に遇はざらんや。



誦經威儀

毎日清晨。盥櫛盛服上香。北向禮拜畢。面北默坐。閉目存想。從自身見今年歲。逆想回孤提愛親時光景何如。又逆想回下胎一聲啼叫時光景何如。又逆想回在母胎中。母呼亦呼。母吸亦吸時光景何如。到此情識俱忘。只有綿々一氣。忽然自生歡喜。然後將身想作箇行孝的曾子侍立在。

曾子行孝。

孔聖說經。經于何在。在吾此身。手

毎日清晨に盥櫛盛服して香を上り、北に向つて禮拜し畢り、北に面つて默坐し、目を閉ぢ想を存す。自身見今の年歳より、逆サカに孩提親を愛せし時の光景いかんと想ひ回す。又逆サカに胎を下つて一聲啼叫せし時の光景いかんと想ひ回す。又逆サカに母の胎中に在りて、母呼すれば亦呼し、母吸するも亦吸せし時の光景いかんと想ひ回す。此こゝに到つて情識俱に忘れ、只綿々たる一氣あり。忽然として自おのづから歡喜を生ず。然して後身を將つて箇かの孝を行ふ的の曾子侍立して孔子の側かたはらに在りと想ひ作して、限なく恭敬し限なく愛樂し、然して後に目を開き手を舉げ、稱讚して曰く、

曾子孝を行ひ、

孔聖經を説きたまふ。經いづれにか在る。吾が此の身

圓足方。耳聰目明。人々俱足。物々完成。離身無孝。離孝無身。立身行道。身立道行。光于四海。通于神明。至德要道。地義天經。我今持誦不得循聲。願明實義。廣育羣英。上尊主德。下庇斯民。庶幾夙夜無忝所生。

にあり。手は圓まに足は方に、耳は聰に目は明なり。人々俱に足り物々完く成る。身を離れて孝なく孝を離れて身なし。身を立て道を行ふ。身立ち道行はれて四海に光あかりかに神明に通ず。至德要道、地義天經、我今持誦して聲に循ふことを得ず。願はくば實義を明かにし、廣く羣英を育し、上主德を尊び下斯の民を庇あまんことを。庶幾はくは夙夜に所生を忝はづかしむることなからん。



定本孝經啓蒙 目次

解題	一
凡例	七
全孝圖說	九
全孝心法	三
誦經威儀	四
孝經啓蒙	七
開宗明義の章 第一	七
天子の章 第二	七
諸侯の章 第三	三
卿大夫の章 第四	三
士の章 第五	三
庶人の章 第六	四
孝平の章 第七	四
三才の章 第八	四
孝治の章 第九	五
聖治の章 第十	五
父母生養の章 第十一	五
孝優劣の章 第十二	七
紀孝行の章 第十三	八
五刑の章 第十四	八
廣要道の章 第十五	八
廣至徳の章 第十六	八
感應の章 第十七	九
廣揚名の章 第十八	九
闔門の章 第十九	九
諫争の章 第二十	一〇
事君の章 第二十一	一〇
喪親の章 第二十二	一〇

定本 孝經 啓蒙

藤樹先生原著  
後學 加藤盛一校訂並譯註

孝經

經曰。夫孝天之經也。地之義也。民之行也。天地之經。而民是則之。此乃孝經二字之本義也。此經專發明其體統。故命之曰孝經。孝與經非有二。孝其體統之總號。經所以明其神化不測也。字義詳解。見于翌傳。

經に曰く、夫れ孝は天の經なり、地の義なり、民の行なり。天地の經にして、民これ之に則ると。此れ乃ち孝經二字の本義なり。此の經もつばら其の體統を發明す。故に之に命じて孝經といへり。孝と經と二あるにあらず。孝は其の體統の總號にして、經は其の神化不測を明かにするゆゑなり。字義の詳解は翌傳に見えたり。

仲尼閒居。曾子侍坐。子曰。參。

仲尼閒居したまふ。曾子侍坐せり。子曰く、參、

乃ち、眞蹟戸田氏本は乃を「いまし」とよまれたり。益田氏本孝經句解亦同じ。所以、眞蹟戸田氏本の先生の附點には、多く以て……所と見ゆ。今は普通の讀み方に従ふ。

翌傳、書院寫本翼傳に傳の字を倚記す。孝經啓蒙の字義を細説する。啓蒙の如きもの。今日に傳はらず。



先王有至德要道。以順天下。民用和睦。上下無怨。女知之乎。

先王至德要道あり、以ひて天下を順にす。民は用ひて和睦し、上下怨みなし。女之を知るやと。

仲尼孔子字也。閒居謂閒暇居處之時。

仲尼は孔子の字なり。閒居とは閒暇居處の時を謂ふ。

曾子名參。字子輿。接孔門之道統人也。子者男子之通稱也。稱

曾子名は參、字は子輿、孔門の道統を接ける人なり。子とは男子の通稱なり。曾子と稱する者は之を尊んで

曾子者尊之。侍坐者卑者在尊者之側曰侍。侍者有坐有立。以待於閒

なり。侍坐とは、卑者尊者の側に在るを侍といふ。侍するに坐するあり、立つあり。閒居に侍するを以ての

居故坐也。子曰。正義曰。古者謂師爲子。先泛指古先盛世而言。董

故に坐するなり。子曰くとは、正義に曰く古は師を謂つて子となせりと。先とは泛く古先の盛世を指してい

仲舒曰。古之造文者。三畫而連其中。謂之王。三者天地人也。而參

ふ。董仲舒曰く古の文を造る者三畫して其の中を連ぬ。之を王と謂ふと。三とは天地人なり。而して之に

通之者王也。孔子曰。一貫三爲王。愚按有三才一貫之道德者。即聖人

と。愚按するに三才一貫の道德ある者即ち聖人なり。古王位にある者は必ず聖徳あり。聖徳ある者は必ず王

也。古者在王位者。必有聖徳。有聖徳者。必登王位。王即聖也。聖

位に登る。王は即ち聖なり、聖は即ち王なり。故に先

聖徳者。必登王位。王即聖也。聖

位に登る。王は即ち聖なり、聖は即ち王なり。故に先

即王也。故不謂先聖而謂王。而聖在其中矣。至者極也。善也。大也。達也。極善大而无不通之義也。德

聖と謂はずして王と謂へり。而して聖は其の中に在り。至とは極なり、善なり、大なり、達なり。善大を

者天性惣號。善美正大光明純懿之稱也。樂記曰。德者得也。言人之所得乎天。而無入而不自得也。德

大光明純懿の稱なり。樂記に曰く徳は得なりと。言ふこゝろは人の天に得る所にして、入るとして自得せず

本自極善大。而無所不通者也。而孝其全體本實。故曰至德。要道。正義曰以一管衆爲要。易簡一貫之

といふことなきなり。徳は本自ら善大を極めて通ぜざる所無き者なり。而して孝は其の全體本實なり。故

道本易簡一貫者也。而孝其全體本實。故曰要道。至與要互相發明。

に至徳といふ。要道とは、正義に曰く一を以て衆を管するを要とすと。易簡一貫の義なり。性に率ふを道と

至故要。要故至也。順從也。和也。從性而无所乖戾。无不通利之義也。所謂仁者順之體也。至德要道之順。

謂ふ。即ち徳の感通なり。道はもと易簡一貫なる者なり。而して孝は其の全體本實なり。故に要道といふ。

至と要と互に相發明す。至なるが故に要なり。要なるが故に至なり。順は從なり、和なり。性に從つて乖戾す

所謂仁者順之體也。至德要道之順。

る所なく、通利ならずといふことなき義なり。いはゆる仁とは順の體なり。至德要道の順は天下人心の固有

所謂仁者順之體也。至德要道之順。

る仁とは順の體なり。至德要道の順は天下人心の固有

曾子、書院寫本は「曾は氏」に作る。

侍坐以下の文多く孝經の疏の文に從はれたり。正義に曰く、孝經注疏をさす。

董仲舒曰くより孔子曰云々の文は説文解字の文。

愚按するに、先生自ら謙していふ。下同じ。下文或は竊意とも見ゆ。



天下人心之所固有也。故先王用至德要道之順。以風化天下。而天下之人。各興至德要道之順。而无一夫之不獲。此之謂順天下。經所謂以順則。記所謂大順是也。不曰治而曰順者。所以明德化之自然。而无思不服。民人也。指諸侯卿大夫士庶人天下之人而言。用謂心術躬行愛用至德也。和順也。相應也。睦親也。敬和也。言五倫之交。順理相應。敬以相親和。而无所乖戾也。上下無怨者。中庸所謂在上位不陵下。在下位不援上。正己而不求於人。則無怨。上不怨天。下不尤人是也。天包人。故不言尤。而

する所なり。故に先王至德要道の順を用ひて以て天下を風化する。而して天下の人各至德要道の順を興して、一夫も獲ずといふことなし。此を天下を順にすといふ。經にはゆる順を以てすれば則る。記にはゆる大順是なり。治むといはずして順といふは徳化の自然にして思つて服せずといふことなきを明すゆゑなり。民は人なり。諸侯卿大夫士庶人天下の人を指して言ふ。用ひてとは心術躬行とも至徳を愛用するをいふ。和は順なり、相應するなり。睦は親なり、敬和するなり。言ふことろは五倫の交り理に順つて相應じ、敬以て相親和して乖戾する所なきなり。上下怨なしとは、中庸にはゆる上位に在つて下を陵がす、下位に在つて上を援かす、己を正しくして人に求めざるときは、則ち怨みなし。上天を怨まず。下人を尤めずといふものこれなり。天は人を包ぬ。故に尤むと言はずし

記にはゆる大順、禮記禮運の語。大順とは生を養ひ死を送り鬼神に事ふる所以の常なりと。

尤在怨中矣。

曾子避席曰。參不敏。何足以知之。

て、而も尤めは怨の中にある。曾子席を避けて曰く、參敏からず。何ぞ以て之を知るに足らん。

之、至徳要道をさす、戸田氏本至要二字を傍記す。

席坐席也。禮師有問。避席起對。曾子侍師而坐。故敬孔子之問。避席而起。敏速也。不敏猶言遲鈍。此辭讓而對也。

子曰。夫孝德之本也。教之所由生也。

夫者發語辭。亦指示語。本木之根。幹枝所由以生也。仁義禮智根心。而孝又爲五性之本實。故曰德之本。以明至德二字之義。教之所由生也者。中庸所謂率性之謂道。脩道之謂教是也。言聖人一言一動以至禮

子曰く、夫れ孝は徳の本なり。教の由つて生ずる所なり。

仁義禮智心に根す。孟子子盡心上篇の語。



樂刑政。皆無非教。然其要在于五典。而孝又爲五典之樞要。由人心本自有固有之要道。而教化之神速。生々活潑。至於愛敬盡於事親。而德教加於百姓。刑於四海。故曰教之所由生也。生字謂生々活潑地。以明要道二字之義也。

復坐。吾語女。身體髮膚受之父母。不敢毀傷。孝之始也。立身行道揚名於後世。以顯父母。孝之終也。夫孝始於事親。中於事君。終於立身。

復還也。夫子之言未竟。又將更端

而語之。以曾子避席起立。故命之還坐而聽也。身惣言其大。体謂四肢。髮毛髮。膚皮膚。此身體髮膚不可認作血肉之身體髮膚。可作道器合一之身體髮膚看。蓋人之身體髮膚。本性命之凝聚。而无道器之分。道即器。器即道也。所謂仁者人也。形色天性也。惟聖人。然後可以踐形是也。人失其本心。而后道與器分離。而初爲血肉之空殼子而已。敢忍爲也。不敢猶言不忍也。毀謂虧辱。傷謂破損。所謂戒懼慎獨是也。孝之始也。言從孝德發見之最初。而明孝德之起頭處也。立成也。堅也。全其本然。而渾成貞

一言一動より以て禮樂刑政に至るまで皆教に非ずといふことなし。然れども其の要は五典に在り。而して孝は又五典の樞要たり。人心もと自ら固有の要道あるに由つて、教化の神速なること生々活潑にして、愛敬親に事ふるに盡して德教百姓に加はり四海に刑らるるに至る。故に教の由つて生ずる所なりといへり。生の字は生々活潑地をいふ。以て要道二字の義を明かにするなり。

復り坐れ。吾女に語げん。身體髮膚は之を父母に受けたり。敢て毀ひ傷らざるは孝の始なり。身を立て道を行ひ名を後世に揚げて以て父母を顯はすは孝の終なり。夫れ孝は親に事ふるに始まり、君に事へまつるに中ごろし、身を立つるに終る。

復るは還るなり。夫子の言未だ竟らず、又將に端を更

めて之に語げんとす。曾子席を避けて起立するを以ての故に之に命じて還り坐して聽かしむ。身は其大を總べ言ひ、體は四肢を謂ふ。髮は毛髮、膚は皮膚なり。此の身體髮膚は血肉の身體髮膚と認めなすべからず、道器合一の身體髮膚となして看るべし。蓋し人の身體髮膚は本性命の凝聚にして、道と器との分なし。道は即ち器、器は即ち道なり。いはゆる仁とは人なり。形と色とは天性なり。惟聖人にして然る後以て形を踐む可しといふものこれなり。人其の本心を失ひて而して後道と器と分離して、初めて血肉の空殼子となるのみ。敢てとは忍んで爲すなり。敢てせずとは猶ほ忍びずと言ふがごとし。毀は虧辱を謂ひ、傷は破損を謂ふ。いはゆる戒懼慎獨これなり。孝の始なりとは、孝德發見の最初に從つて孝德の起頭の處を明かにするをいふ。立つとは成なり、堅なり。其の本然を全くして

由人心本自有固有之要道、由の字諸本自の下有の上にある。今謹みて上に移す。

君に事へまつる、先生の假名書き孝經に君上に對する時、特に敬語を加へらる。今之に從ふ。以下同じ。

道器合一、易繫辭上傳に形而上の者之を道といひ、形而下の者之を器といふより來る。形而上の性命と形而下の身體との二を合一したるをいふ。仁とは人なり、孟子盡心下篇の語。孟子盡心下篇の語。形色天性なり云々、同じく盡心上篇の語。

戒懼慎獨、大學の句。



固之意。身謂道器合一萬物一体的身。勿作血肉空殼身講。道即要道也。行道者即上文以順天下。民用和睦是也。立身行道。非兩事。立身所以立行道之體也。行道所以達立身之用也。然体用一源。功夫無二致。只就已而言之。謂立身。就與人交而言之。謂行道而已。揚傳播也。名者實之賓也。謂揚后世者。所以明其名自然之公論而不朽也。此舉名之不朽。以明至德無終始而不朽。只勿泥揚名上而講。以指所立身行道揚名言。顯明也。著也。與宗廟致敬鬼神著矣之著同意。吾與父母本一体。而无間隔。故吾立

渾成貞固の意なり。身は道器合一・萬物一体的の身をいふ。血肉空殼の身となして講すること勿れ。道は即ち要道なり。道を行ふとは即ち上文以て天下を順にす。民用ひて和睦するものは是なり。身を立て道を行ふは兩事に非ず。身を立つるは道を行ふの體を立つるゆゑなり。道を行ふは身を立つるの用を達するゆゑなり。然れども體用一源、功夫二致なし。只己に就いて之を言ふときは身を立つといひ、人と交るに就いて之を言ふときは道を行ふと謂ふのみ。揚ぐとは傳へ播くなり。名は實の賓なり。後世に揚ぐといふは其の名自然の公論にして朽ちざるを明すゆゑなり。此に名不朽を擧げて以て至德は終始なくして朽ちざるを明す。只名を揚ぐる上に泥んで講すること勿れ。以てとは身を立て道を行ひ名を揚ぐる所を指して言ふ。顯は明なり、著なり。宗廟に敬に致れば鬼神著はるの著と同意。

名は實の賓、老子の語。

天下を順にす、此の句の下戸田氏本益田氏本並に民の字無し。岡田氏本に従つて之を補ふ。

身行道。則父母鬼神著而享之。吾名傳播。則父母之名。亦因以光顯也。終如終條理之終。謂孝行成功盡頭處。言孝行始興於不敢毀傷之戒懼。而終成於立身行道揚名顯親也。始於事親。中於事君。此始中言行道之本末先后也。始於事親者。以示百行不原于不敢毀傷之孝心。則悖德悖禮。而雖得之不足貴者也。中於事君者。泛謂孝德之感通。君臣長幼朋友之交。君臣之義最重。故舉君臣以包其餘。終於立身。終非始終之終。畢竟歸宿之意。此一句一截之結句也。不可對始于事親中於事君而看。言自不敢毀傷以至

意。吾と父母と本一體にして間隔なし。故に吾身を立て道を行ふときは、則ち父母の鬼神著はれて之を享く。吾が名傳へ播くときは、則ち父母の名も亦因つて以て光顯するなり。終は條理を終るの終の如し。孝行の成功盡頭の處を謂ふ。孝行は敢て毀ひ傷らざる戒懼に始まり興つて身を立て道を行ひ名を揚け親を顯はすに終成するを言ふ。親に事ふるに始まり君に事へまつるに中ごろす。此の始中は道を行ふ本末先後を言ふ。親に事ふるに始まるとは以て百行敢て毀ひ傷らざる孝心に原かざるときは、則ち悖德悖禮にして、之を得と雖も貴ぶに足らざるを示す者なり。君に事へまつるに中ごろすとは泛く孝德の感通を謂ふ。君臣長幼朋友の交、君臣の義最も重し。故に君臣を擧げて以て其餘を包ぬ。身を立つるに終る。終は始終の終に非ず。畢竟歸宿の意。此の一句は一截の結句なり。親に事ふる

條理を終る、孟子萬章上篇の語。



立身行道揚名顯親。五倫之交。日用百行。畢竟歸著于立身也。

に始まり君に事へまつるに中ごろするに對して看るべからず。敢て毀ひ傷らざるより以て身を立て道を行ひ名を揚け親を顯はすに至るまで。五倫の交り日用百行畢竟身を立つるに歸着するを言ふ。

大雅云。無念爾祖。聿脩厥德。

大雅に云く、爾が祖を念ふこと無らんや。厥の德を聿べ脩むと。

詩大雅文王之篇。凡此經引詩書者。有三義。一證之示言不虛發也。一用爲結前起后之語。一取咏歎優遊。有以感發人之善心也。无念猶言豈得无念也。爾泛指人言。祖指生之本言。身之本父母也。父母之本。推之至始祖。始祖之本天地也。天地之本大虛也。舉一祖。而包父母先祖天地大虛。此一句咏嘆不敢毀

詩は大雅文王の篇なり。凡そ此の經詩書を引く者三義あり。一は之を證して言虚しく發せざるを示す。一は用ひて前を結び後を起すの語となす。一は咏嘆優遊して以て人の善心を感發することあるに取る。念ふことなからんやとは猶ほ豈念ふことなきを得んやと言ふがごとし。爾は泛く人を指して言ふ。祖は生の本を指して言ふ。身の本は父母なり。父母の本は之を推して始祖に至る。始祖の本は天地なり。天地の本は大虚なり。一祖を擧げて父母先祖天地大虚を包ぬ。此の一

優遊、戸田氏本、益田氏本並に優遊に作る。今讀みて訂す。

身の本は父母云々、先生の大虚説孝の形而上學を知るべき一項とす。禮記郊特牲に萬物は天に本づき人

傷之蘊。聿述也。厥其也。指祖而言。德即至德也。此一句咏嘆立身行道揚名顯親等蘊。

句、敢て毀ひ傷らざる蘊を咏嘆す。聿は述ぶるなり。厥は其なり。祖を指して言ふ。德は即ち至德なり。此の一句、身を立て道を行ひ名を揚け親を顯はす等の蘊を咏嘆す。

天子の章第二

愛親者。不敢惡於人。敬親者。不敢慢於人。愛敬盡於事親。而德教加於百姓。刑於四海。蓋天子之孝也。

親を愛する者は、敢て人を惡まず。親を敬する者は、敢て人を慢らす。愛敬親に事ふるに盡して、德教百姓に加はり、四海に刑らる。蓋し天子の孝なり。

愛者順德之愛。發而中節之和。經所謂博愛也。親父母也。下敬親之親放此。須包先祖天地大虚看。不敢即不敢毀傷之不敢也。不敢惡者。即親愛也。不曰愛而云爾者。以示不忍人之心不能已者也。人包天下

愛は順德の愛、發して節に中るの和、經にはゆる博愛なり。親は父母なり。下親を敬するの親もこれに放へ。須らく先祖天地大虚を包ねて看るべし。敢てせずとは即ち敢て毀ひ傷らざるの敢てせざるなり。敢て惡まずとは即ち親愛なり。愛といはずしてしか云ふものは、以て人に忍びざる心已む能はざるを示すものな

は祖に本づくことあり。



之五倫言。下不慢於人之人亦放此。敬者順德之敬。發而中節之和。經所謂敬一人而千萬人悅之敬也。不敢者。亦不毀傷之條目也。不慢者敬也。不曰敬而云不敢慢者。以示不忍人之心不能已也。盡者極其全而无遺之意也。愛之極爲敬。敬之至爲齋。齋戒洗心。到得浩然之氣塞乎兩間。赫然之光照乎四表。方纔是謂愛敬盡于事親。堯克明峻德是也。德卽至德也。教脩道之教。存神過化。自然之教化也。大學所謂上老老而民興孝。上長長而民興弟。上恤孤而民不倍之意也。德教卽上文愛敬盡于事親是也。加施也。

り。人は天下の五倫を包ねて言ふ。下人を慢らざるの人も亦此に放へ。敬は順德の敬、發して節に中るの和、經にいはゆる一人を敬して千萬人悦ぶの敬なり。敢てせずとは亦毀ひ傷らざるの條目なり。慢らざるは敬なり。敬といはずして敢て慢らずといふものは、以て人に忍びざる心已むこと能はざるを示す。盡すとは其の全を極めて遺すことなき意なり。愛の極を敬となす。敬の至を齋となす。齋戒して心を洗ひ、浩然の氣兩間に塞がり、赫然の光四表を照すに到り得て、方にわづかに是を愛敬親に事ふるに盡すといふ。堯の克く峻德を明かにすとは是なり。德は卽ち至德なり。教は道を脩むるの教、存神過化、自然の教化なり。大學にいはゆる上老を老として民孝に興り、上長を長として民弟に興り、上孤を恤みて民倍かざるの意なり。德教は卽ち上文愛敬親に事ふるに盡すといふこれなり。加

愛の極を敬となす……  
赫然の光四表を照す。江元祚全孝心法中の語。

存神過化、孟子盡心上君子過ぐる所のものは化し、存する所の者は神、感化の偉大なるをいふ。

君子の德は風なり、論語類義篇の語。

疏に曰く、孝經注疏をさす。

著也。與君子之德風。小人之德草。草上之風必偃之上字同意也。疏曰。百姓謂天下之人皆有族姓。言百舉其多也。尙書曰平章百姓。則謂百姓爲百官。爲下有黎民之文。所以百姓非兆庶也。此經德教加于百姓。則謂天下百姓。爲與刑于四海相對。四海既是四夷。則此百姓自然是天下兆庶也。堯之親九族。九族既睦。平章百姓。百姓昭明。協和萬邦。爾黎民於變時雍。是也。刑法也。爾雅曰。九夷八狄七戎六蠻。謂之四海。疏曰。海之言晦。晦闇于禮義也。刑于四海者。中庸所謂舟車所至。人力所通。天之所覆。地之所

はるは施すなり、著はるゝなり。君子の德は風なり。小人の德は草なり。草之に風を上ふるときは、必ず偃すの字と同意なり。疏に曰く、百姓は天下の人皆族姓あるを謂ふ。百といふは其の多きを擧ぐるなり。尙書に曰く百姓を平章にすと。則ち百姓と謂ふも百官たり。下に黎民の文あるが爲に百姓は兆庶に非ざるゆゑなり。此の經の德教百姓に加はるとは、則ち天下の百姓をいふ。四海に刑らると相對する爲に、四海既に是れ四夷なれば、則ち此の百姓は、自然に是れ天下の兆庶なりと。堯の九族を親しみ、九族既に睦み、百姓を平章にす。百姓昭明にして萬邦を協和し、黎民あゝ變りこれ雍ぐといふ是なり。刑は法なり。爾雅に曰く九夷八狄七戎六蠻之を四海と謂ふと。疏に曰く海の言は晦なり。禮義に晦闇なるなりと。四海に刑らるとは、中庸にいはゆる舟車の至る所、人力の通ずる所、

爾雅釋天の文。

疏に曰く、こゝは爾雅の邢疏をさす。四海とは文華未開の地の意、もと海の陰晦なるよりいふ。



載。日月所照。霜露所隊。凡有血氣者。莫不尊親。故曰配天之義也。堯之光被四表。格于上下是也。蓋大凡也。言略舉其綱要也。天子帝王之爵。表記曰。惟天子受命于天。故曰天子。白虎通曰。王者父天母地。亦曰天子。虞夏以上未有此名。殷周以來始謂王者為天子也。

天の覆ふ所、地の載する所、日月の照す所、霜露の隊つる所、凡そ血氣あるもの尊親せざるはなきなり。故に天に配すといふ義なり。堯の四表に光被し上下に格るといふものは是なり。蓋しとは大凡なり。其の綱要を略舉するを言ふ。天子は帝王の爵なり。表記に曰く惟れ天子命を天に受く。故に天子といふと。白虎通に曰く王は天を父とし地を母とす。亦天子といふ。虞夏以上いまだ此の名あらず。殷周以來始めて王者を謂つて天子となせりと。

天に配す、孝經下文の父を敬ぶは天に配するより大なるはなしといふもの。表記に曰く、白虎通に曰く、並に孝經注疏中の題疏の文。

甫刑曰。一人有慶。兆民賴之。

甫刑に曰く、一人慶あれば、兆民これを頼ると。

甫刑尙書呂刑也。尙書有呂刑。而无甫刑。孔安國曰。後為甫侯。故稱甫刑。一人天子也。慶善也。福也。有慶言有以愛敬盡於事親之善。

甫刑は尙書の呂刑なり。尙書には呂刑あれども、甫刑なし。孔安國曰く、後に甫侯となる。故に甫刑を稱すと。一人は天子なり。慶は善なり、福なり。慶ありとは、愛敬親に事ふるに盡すの善あつて、富四海を保つ

孔安國曰く云々、尙書呂刑の傳をさす。

而受富保四海之福。兆民十萬為億。十億為兆。姓言百。民稱兆。皆舉其多也。賴蒙也。之指有慶之慶。賴之言兆民蒙天子至德之福蔭。而家々和睦。人々無怨。所謂德教加於百姓。刑于四海是也。

の福を受くるあるをいふ。兆民とは、十萬を億となし、十億を兆となす。姓に百をいひ、民に兆と稱するは、皆其の多きを擧ぐるなり。賴るは蒙るなり。之とは慶有りの慶を指す。之を頼るとは、兆民天子至德の福蔭を蒙りて家々和睦し、人々怨みなきを言ふ。いはゆる德教百姓に加はり、四海に刑らるといふものはなり。

諸侯の章第三

居上不驕。高而不危。制節謹度。滿而不溢。高而不危。所以長守貴也。滿而不溢。所以長守富也。富貴不離其身。然後能保其社稷。而和其民人。蓋諸侯之孝也。

居上者。居一國臣民之上也。驕矜

上に居て驕らざれば、高けれども危からず。節を制し度を謹めば、滿つれども溢れず。高くして危からざるは、以て長く貴を守る所なり。滿ちて溢れざるは、以て長く富を守る所なり。富貴其の身を離れずして、然る後に能く其の社稷を保つて其の民人を和す。蓋し諸侯の孝なり。上に居るとは一國臣民の上に居るなり。驕るとは矜肆



肆也。不驕謂卑以自牧。稱物平施也。高謂諸侯貴爲一國之主。其位之崇。如自高臨下。危謂勢將隕墜之。制止也。節謂時措之天則也。制節易所謂制數度議德行。不傷財。不害民。度法制也。法之一定如度有分限也。謹度謂謹守諸侯可守之法度也。滿謂諸侯之富有一國之財。其祿之豐如水滿器中。溢如水之溢。貴位尊曰貴也。此謂諸侯之貴。富。財足曰富也。此謂一國之富。保謂不亡失。社稷。正義曰。天子大社東方青。南方赤。西方白。北方黑。中央黃土。若封四方諸侯各割其方色土。直以白苴。而與之。

なり。驕らずとは卑うして以て自ら牧ひ、物を稱つて施を平かにするを謂ふ。高しとは諸侯の貴きこと一國の主たり、其の位の崇きこと高きより下に臨むが如きを謂ふ。危しとは勢ひ將に之を隕墜せんとするをいふ。制は止なり。節は時に措くの天則を謂ふ。節を制すとは易にいほゆる數度を制し德行を議し、財を傷らず民を害せざるなり。度は法制なり。法の一定せること度の分限あるが如し。度を謹むとは諸侯守る可き法度を謹守するを謂ふ。滿つとは諸侯の富一國の財を有ち、其の祿の豊かなること水の器中に滿つるが如きをいふ。溢るとは水の溢れ出づるが如きなり。貴とは位尊きを貴といふなり。此は諸侯の貴きを謂ふ。富とは財足を富といふ。此は一國の富をいふ。保つとは亡失せざるをいふ。社稷は正義に曰く、天子の大社東方は青、南方は赤、西方は白、北方は黒、中央は黃土、若

卑くして自ら牧ふ、易謙卦初六象辭。物を稱つて施を平にす、謙卦大象の辭。  
時に措く、中庸に時に之を措いて宜しきなり。  
易にいほゆる云々、節卦の大象と象傳となり。

正義に曰く云々、孝經注疏の文。たゞ節略して抄出せらる。

諸侯以此土封之爲社。明受於天子也。社土神。稷五穀之長。亦爲土神。按左傳曰。共工氏之子曰句龍。爲后土。后土爲社。有烈山氏之子。曰柱爲稷。自夏以上祀之。周棄亦爲稷。自商以來祀之。言句龍柱棄配社稷。而祭之。即句龍柱棄非社稷也。稷壇在社西。俱北鄉。並列同營共門。和謂各率用孝德相愛敬。而无所乖戾也。民是無位者。人是有位者。諸侯謂五等國君。公九命。侯伯七命。子男五命。

詩云。戰々兢々。如臨深淵。如履薄氷。

し四方の諸侯を封すれば各其の方色の土を割きて直むに白苴を以てして之を與ふ。諸侯此の土を以て之を封じて社と爲す。天子に受くるを明かにす。社は土神なり。稷は五穀の長、亦土神たり。按ずるに左傳に云く共工氏の子を句龍といふ。后土となす。后土を社となす。烈山氏の子あり。柱といひ稷となす。夏より以上之を祀る。周棄も亦稷たり。商より以來之を祀る。句龍柱棄社稷に配して之を祭るを言ふ。即ち句龍柱棄は社稷に非ず。稷壇は社の西に在り。俱に北に鄉ふ。列を並べ營を同うし門を共にすと。和は各孝德を率ひ用ひ相愛敬して乖戾する所なきを謂ふ。民は是れ無位の者、人は是れ有位の者なり。諸侯は五等の國君を謂ふ。公は九命、侯伯は七命、子男は五命とす。

直以白苴、下の苴の字汲古閣本は茅に作る。阮元の校勘記も茅に作るを是となせり。  
左傳に云く云々、昭公二十九年の文、こゝは正義中の引用句なり。  
公は九命云々、周禮春官典命の文。後出。  
戰々、岡田氏本には恐懼貌の三字あり。  
兢々、同上戒謹貌の三字あり。



詩小雅小旻之篇。如臨深淵如履薄水。此二句以形容不敢毀傷之敬心。是乃全孝之心法。慎獨之要也。

詩は小雅小旻の篇なり。深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し。此の二句は以て敢て毀ひ傷らざる敬心を形容す。是れ乃ち全孝の心法にして慎獨の要なり。

卿大夫の章第四

非先王之法服。不敢服。非先王之法言。不敢道。非先王之德行。不敢行。是故非法不言。非道不行。口無擇言。身無擇行。言滿天下無口過。行滿天下無怨惡。三者備矣。然後能守其宗廟。蓋卿大夫之孝也。

先王の法服に非ざれば敢て服せず。先王の法言に非ざれば敢て道はず。先王の德行に非ざれば敢て行はず。この故に法に非ざれば言はず。道に非ざれば行はず。口に擇ぶ言なく身に擇ぶ行なし。言天下に満ちて口の過なく、行天下に満ちて怨み悪まるゝなし。三つの者備はりぬ。然る後能く其の宗廟を守る。蓋し卿大夫の孝なり。

法字必不可制作定法看。可作中庸活法看。服者身之表也。上曰衣。

法の字必ず制作定法と作して看る可からず。中庸の活法と作して看る可し。服は身の表なり。上を衣といひ

下曰裳。通言之皆曰服。不敢即不敢毀傷之不敢也。下放此。法言。此法亦中庸活法也。言言語也。集解曰。揆道而言曰法言。道言也。德包性道而言。行躬行也。率性而行曰德行。非法謂不合中庸之活法也。非道謂不率性道之德也。口无擇言者。言自其口出。一皆心之中庸。則無可揀擇是非之言。身无擇行者。言其躬行一皆率性道。則無可揀擇是非之行也。言行滿天下者。卿大夫立朝。則接待賓客。出聘則將命他邦。故言行滿天下。口過謂言不合法出口有差。怨惡謂行不合道召怨取惡。三者服言行也。備謂

下を裳といふ。通じて之を言へば皆服といふ。敢てせずとは即ち敢て毀ひ傷らざるの敢てせざるなり。下此に放へ。法言、此の法も亦中庸の活法なり。言は言語なり。集解に曰く道を揆つて言ふを法言といふと。道は言ふなり。徳は性道を包ねて言ふ。行は躬行なり。性に率つて行ふを德行といふ。法に非ずとは中庸の活法に合せざるを謂ふ。道に非ずとは性道の徳に率はざるを謂ふ。口に擇ぶ言なしとは、言其の口より出で、一みな心の中庸なるときは、則ち是非を揀擇すべき言無きなり。身に擇ぶ行なしとは其の躬行一皆性道に率ふときは、則ち是非を揀擇すべき行無きを言ふ。言行天下に満つとは、卿大夫朝に立てば則ち賓客に接待し、出で、聘すれば則ち命を他邦に將ふ。故に言行天下に満つ。口の過とは言法に合せず口より出で、差あるを謂ふ。怨み悪むとは行道に合せず怨を召き悪

集解、明の朱鴻の家塾孝經なり。明江元祚の孝經大全、孝經彙注の中にあり。



服言行全守中庸。而無虧欠也。宗尊也。庶兒也。言先祖之尊兒之所  
在也。爾雅室在東西廂曰廟。卿說文云。卿章也。白虎通云。卿之爲言章也。章善明理也。大夫之爲言大扶。扶進人者也。故傳云。進賢達能謂之卿大夫。此卿大夫謂王朝侯國之臣。按周禮王之卿六命。大夫四命。子男之卿再命。大夫一命。今連言者。以其行同也。

詩云。夙夜匪懈。以事一人。

詩大雅烝民之篇。夙早也。匪猶不也。懈惰也。匪懈謂敬勤。以夙

みを取るを謂ふ。三の者とは服言行なり。備はるとは服言行全く中庸を守つて虧欠なきを謂ふ。宗は尊なり。廟は貌なり。先祖の尊貌の在る所を言ふ。爾雅に室東西の廂に在るを廟といふと。卿は説文に云く卿は章なりと。白虎通に云く卿の言たる章なり。善を章はし理を明かにするなり。大夫の言たる大扶なり。人を扶け進むる者なり。故に傳に云く賢を進め能を達する之を卿大夫と謂ふと。此の卿大夫は王朝侯國の臣を謂ふ。按ずるに周禮に王の卿は六命、大夫は四命、子男の卿は再命、大夫は一命なりと。今連ね言ふものは其の行同じきを以てなり。

詩に云く、夙夜に懈らず、以て一人に事へまつると。

詩は大雅烝民の篇なり。夙は早なり。匪は猶不のごとし。懈るは惰るなり。懈らずとは敬勤を謂ふ。以てと

夜匪懈之敬勤也。一人天子也。

士の章第五

資於事父以事母。而愛同。資於事父以事君。而敬同。故母取其愛。而君取其敬。兼之者父也。故以孝事君則忠。以敬事長則順。忠順不失以事其上。然後能保其爵祿。而守其祭祀。蓋士之孝也。

は夙夜懈らざる敬勤を以てするなり。一人は天子なり。

父に事ふるに資つて以て母に事ふ。而して愛同じ。父に事ふるに資つて以て君に事へまつる。而して敬同じ。故に母には其の愛を取つて、君には其の敬を取る。之を兼ねたる者は父なり。故に孝を以て君に事へまつるときは、則ち忠なり。敬を以て長に事ふるときは、則ち順なり。忠順以て其の上に事へまつるに失はずして、然る後に能く其の爵祿を保つて、其の祭祀を守る。蓋し士の孝なり。

資取也。與秉夷執中之秉執同。守而不失之意。事父謂一本之孝德以明無非往而事父之孝也。以指資於

士の章第五

資るは取るなり。夷を秉り中を執る秉執と同じ。守つて失はざる意。父に事ふとは一本の孝德を謂つて以て往くとして父に事ふるの孝に非ざることなきを明す。

夷を秉る、夷は烝に同じ。詩大雅烝民、民の夷を秉る、是の懿徳を好む。孟子告子上篇に引くところ。







説文云。數始於一。終於十。孔子曰推一答十爲士。白虎通曰。士者事也。任事之稱也。傳云。通古今辨然不然。謂之士。此士謂王朝侯國之小臣及卿大夫之家臣。王之上士三命。中士再命。下士一命。公侯伯之士一命。子男之士不命。

詩云。夙興夜寐。無忝爾所生。

詩小雅小宛之篇。夙興夜寐謂日乾夕惕無間斷也。無與毋通。禁止之辭。忝辱也。所生謂我所生之本。即父母先祖天地大虛是也。虞氏曰。人生如蜾蠃。兩箇形体相負。乃得

位はこれ公なり。故に保つと云ひ、宗廟祭祀はこれ私なり。故に守ると言ふと。士は、説文に曰く數は一に始まり十に終る。孔子曰く一を推して十に答ふるを士となす。白虎通に曰く士は事なり。事に任ずるの稱なり。傳に云く古今を通じ然不然を辨す。之を士と謂ふと。此の士は王朝侯國の小臣及び卿大夫の家臣を謂ふ。王の上士は三命、中士は再命、下士は一命、公侯伯の士は一命、子男の士は不命なり。

説文に曰く、孝經正義の題疏を節録す。

しむることなかれと。

詩は小雅小宛の篇なり。夙に興き夜に寐ぬとは日に乾め夕に惕れて間斷なきを謂ふ。無は毋と通ず。禁止の辭なり。忝しむるは辱しむるなり。所生とは我が生まれられし本を謂ふ。即ち父母先祖天地大虚これなり。虞氏曰く人生蜾蠃の如し。兩箇の形体相負うて乃ち化

日に乾め夕に惕る。易乾卦象辭、君子終日乾々、夕惕若、厲無咎の略。虞氏曰く云々、明人虞淳熙、孝經通言の語前記孝經彙注中に見ゆ。蜾蠃、すがる、じがばち。

化生。父母生我。不必言了。凡全我化我的人。皆有生我之恩。當朝夕戰々兢々。无忝所生。方是孝子。無忝爾所生。猶言毋仰愧于天。俯作于人。

生するを得。父母我を生むは必ずしも言ひ了らず。凡そ我を全くし我を化する的人は皆我を生む恩あり。當に朝夕戰々兢々として所生を忝しむることなかるべし。方にこれ孝子なりと。爾の所生を忝しむるなかれとは猶ほ仰いで天に愧ぢ俯して人に忤づるなかれと言ふがごとし。

仰いで天に愧ぢ云々、孟子盡心上、三樂中育英の樂の條の語。

庶人の章第六

用天之道。因地之利。謹身節用。以養父母。此庶人之孝也。

天之道謂天道流行爲春生夏長秋收冬藏四時之運也。以春耕。以夏耘。以秋收。以冬藏。此之謂用天之道也。利宜也。地之利謂五土之宜。因地之沃衍隰臯。而稻粱黍稷各隨所宜。此之謂因地之利也。謹身謂

天の道を用ひ、地の利に因る。身を謹み用を節して、以て父母を養ふ。これ庶人の孝なり。天の道とは天道流行して春は生じ夏は長じ秋は收め冬は藏す、四時の運を爲すを謂ふ。春を以て耕し夏を以て耘り秋を以て收め冬を以て藏す。これを天の道を用ふと謂ふ。利は宜なり。地の利とは五土の宜しきを謂ふ。地の沃衍隰臯に因つて稻粱黍稷各宜しき所に隨ふ。これを地の利に因ると謂ふ。身を謹むとは小心敬謹して

五土、疏によれば、一に山林、二に川澤、三に丘陵、四に墳衍、五に原隰なり。沃衍隰臯、沃衍は沃土と平土、隰臯は水澤の地。



小心敬謹。以脩其身。不爲非僻。不犯刑戮也。節謂量入爲出。不妄費。用謂衣服飲食喪祭賓客之用也。以以謹身節用也。養包養口體養志言。謹身所以養志也。節用所以養口體也。庶人言此。自天子至士。孝行廣大。其章略述宏綱。所以言蓋也。庶人用天因地謹身節用。其孝行已盡。故曰此。庶人。正義曰。庶者衆也。謂天下衆人也。皇侃云。不言衆民者。兼包府史之屬。通謂之庶人也。嚴植之以爲士有員位。人無限極。故士以下皆爲庶人。

以て其の身を脩め、非僻を爲さず。刑戮を犯さざるを謂ふ。節とは入るを量つて出づるを爲し、妄りに費さざるを謂ふ。用とは衣服飲食喪祭賓客の用を謂ふ。以てとは身を謹み用を節するを以てするなり。養ふとは口體を養ひ志を養ふを包ねて言ふ。身を謹むは志を養ふゆゑなり。用を節するは口體を養ふゆゑなり。庶人に此と言ふは、天子より士に至るまでは孝行廣大にして其の章宏綱を略述す。蓋しと言ふゆゑなり。庶人は天を用ひ地に因り身を謹み用を節す。其の孝行已に盡く。故に此といへり。庶人は、正義に曰く、庶は衆なり。天下の衆人を謂ふ。皇侃云く衆民と言はざる者は府史の屬を兼包して通じて之を庶人と謂ふ。嚴植之におもへらく士には員位あり。人には限極なし。故に士の以下は皆庶人と爲すと。

入るを量つて出づるを爲す、禮記王制の句。  
口體を養ひ志を養ふ、孟子離婁上篇の語。  
庶人言此、益田氏本に從ふ。最も明瞭なり。  
蓋しと此れとの用法の別を明かにしたるは、注疏の説に本づく。  
正義に曰く云々、庶人の章の題疏の文。

孝平の章第七

故自天下已下。至于庶人。孝無終始。而患不及者。未之有也。

故連上之辭。包上文六節。已下二字正指前所謂諸侯卿大夫士言。孝無終始者。孝在混沌之中。而其生無始。推之后世。而無朝夕。無時非孝也。無所不在。無所不通。生々無終。須臾不可離者也。患慮也。苦也。如患得之之患。及至也。孝無所不至。故民用患不及者。未之有也。未之有也者。反言以深警戒之。言自古及今。未有此理也。蓋爲決言以勉人之力於行孝。

故に天子より已下庶人に至るまで、孝に終始なくして、及ばざるを患ふるものは未だこれあらざるなり。

故は上を連ぬる辭、上文の六節を包ぬ。已下の二字は正に前に謂へる諸侯卿大夫士を指して言ふ。孝に終始なしとは、孝は混沌の中にありて、其の生始めなく、之を後世に推して朝夕なし。時として孝に非ざるはなく、所として在らざるなく、所として通ぜざるなし、生々終なし。須臾も離る可からざる者なり。患ふとは慮なり、苦なり。之を得んことを患ふの患の如し。及ぶは至るなり。孝は至らざる所なし。故に民もつて及ばざるを患ふる者未だこれあらざるなり。未だこれあらざるとは反言して以て深く之を警戒す。古より今に及ぶまで未だ此の理あらざるを言ふ。蓋し決言をなして以て人の孝を行ふに力めんことを勉めしむ。

患へて及ばざるものは未だこれあらざるなり。此の語、阿田氏本に「患は終始なく」とあり。混沌は元氣未だ判れざるなり。の注記あり。之を後世に推して朝夕なし。曾子の語、孝を引く。之を得んことを患ふ、論語陽貨篇、其の未だ之を得ざるや、之及ばざるを患ふ、眞蹟戸田氏本に「患へ及ばざる者未だこれあらざる」とあり。之を得んことを患ふ、眞蹟との意に解すれば、眞筆假名書孝經も亦「一は、いまだこれあらざる」とあり。未だ此の理あらざる、注疏に本づくは、御疏本の註文此の語あり。唯孝に終始なしとの解は、先生獨特のもの。



曾子曰。甚哉孝之大也。子曰。夫孝天之經也。地之義也。民之行也。天地之經。而民是則之。則天之明。因地之利。以順天下。是以其教不肅而成。其政不嚴而治。

甚大過也。深也。甚哉有贊美不盡之意。孝之大。天下莫能載曰大。大者孝德本然之量也。因夫子之教。而曾子有見孝德无外之量。故以大嘆美之也。經常也。如布帛在機之直縷條理一定而易也。蓋天之道生々無息。一陰一陽。天理一定而

三才の章第八

曾子曰く甚だしいかな孝の大なることやと。子曰くそれ孝は天の經なり。地の義なり。民の行なり。天地の經にして、民是れ之に則る。天の明に則り地の利に因り、以て天下を順にす。こゝを以て其の教肅ならずして成り、其の政嚴ならずして治まると。

甚は大に過ぐるなり、深きなり。甚哉とは贊美して盡さざる意あり。孝の大なるとは、天下能く載するなきを大といふ。大は孝德本然の量なり。夫子の教に因りて曾子孝德外なきの量を見るあり。故に大を以て之を嘆美す。經は常なり。布帛機に在る直縷の條理一定にして易らざるが如し。蓋し天の道生々息むなし。一陰一陽、天理一定して易らず。故に象を取るに經を以て

三才、易繫辭下傳に天道あり、人道あり、地道あり。三才を兼ねて之を兩にす云々。

直縷、戸田氏本「たてのいとすぢ」の傍訓あり。

不易。故取象以經。爲天道之殊稱也。義者宜也。順理裁制之謂也。

註疏云。利物爲義。地之道順承天而成物。利莫大焉。故以義爲地道之殊稱也。民人也。行者流行无滯碍之意。易曰。天行健。君子以自强不息。蓋人之道以率性而行无所滯碍爲常。故以行爲人道之殊稱也。天地之經。天包地。故舉經而義在其中矣。凡經者道之惣號也。民是則之。是指人性言。則猶準也。又效法也。資而不違之意。下則字同之字指天地之經言。則之非意之。自然而則之也。人性資天地之經而不違。譬如月之受日光而明不違。

し、天道の殊稱となせり。義は宜なり。理に順つて裁制するを謂ふ。註疏に曰く物を利するを義と爲すと。

地の道は天に順ひ承けて物を成す。利これより大なるは莫し。故に義を以て地道の殊稱となせり。民は人なり。行は流行して滯碍なきの意。易に曰く天行健なり、君子以て自ら強めて息まずと。蓋し人の道は性に率ゐて行つて滯碍する所なきを以て常となす。故に行を以て人道の殊稱となせり。天地の經、天は地を包ぬ。故に經を擧げて義は其の中にあり。凡そ經は道の惣號なればなり。民是れ之に則る、是は人の性を指して言ふ。則るは猶ほ準ふといふがごとし。又效ひ法るなり。資つて違はざる意。下の則の字も同じ。之の字は天地の經を指して言ふ。之に則るは之に意あるに非ず、自然にして之に則るなり。人の性天地の經に資つて違はず。譬へば月の日光を受けて明違はざるが如

註疏に曰く、註にも疏にも此の文あり、以下之に準ず。

易に曰く云々、乾卦大象。







于善謂之化。民人也。先之。先事而爲曰先。之指教而言。博大通也。愛至德之愛也。至德之愛。至大而无所不通。故曰博愛。所謂愛敬盡于事親。而德教加于百姓。刑于四海。孝悌之至。通于神明。光于四海。無所不通是也。民人也。遺猶棄也。莫遺謂愛敬之也。其指民而言。親父母也。陳布也。之指教而言。德者得也。行道而有得于心也。義者宜也。所以裁制事物使合宜也。德義猶言心法也。心法所以行道而有得于心之裁制。使合宜也。書所謂五典。周禮所謂六德等是也。民人也。興謂有所感發而興起也。譬

る、之を化すといふ。民は人なり。之に先んずとは、事に先じて爲すを先んずといふ。之は教を指して言ふ。博は大通なり。愛は至徳の愛なり。至徳の愛は至大にして通ぜざる所なし。故に博愛といふ。いはゆる愛敬親に事ふるに盡して、徳教百姓に加はり、四海に刑らる。孝悌の至りは神明に通じ四海に光かに通ぜざる所なしといふ是れなり。民は人なり。遺るは猶ほ棄つのごとし。遺ることなしとは之を愛敬するを謂ふ。其のとは民を指して言ふ。親は父母なり。陳ふとは布くなり。之は教を指して言ふ。徳とは得なり。道を行つて心に得ることあるなり。義とは宜なり。以て事物を裁制して宜しきに合せしむる所なり。徳義は猶心法と言はんがごとし。心法は道を行つて心の裁制を得て、宜しきに合せしむる所以なり。書のいはゆる五典、周禮のいはゆる六徳等これなり。民は人なり。

會通、同上、會は理の聚つての處をいふ。ざる所の處をいふ。通は理の行はるべくしてさばる所なき處。

徳とは得なり、もと禮記樂記の語。論語爲政篇に徳の言たる得なり、道を行つて心に得ることあるなり。義とは宜なり、中庸の語。書所謂の上、戸田氏本の徳義以下二句未使合宜也同一の爲め誤れるもの。益田氏は欄外に追録す。五典、尙書舜典、慎み五典克く從ふ。孔安國傳に文十八年左傳の父義母慈兄友弟恭子孝を引く。六徳、周禮地官大司徒徳の三物、一に曰く和徳、知仁聖義忠

如寐者之有所驚而寤起也。行所謂民之行也。讓謙也。敬讓本一徳相爲表裏。即上文所謂愛敬盡于事親。而徳教加于百姓。刑于四海之敬也。民人也。不爭謂和睦而無怨也。導之。導啓迪也。之指教而言。禮謂制度品節。所以別嫌明微。儼鬼神。考制度。治政安君也。樂有五聲十二律。更唱迭和。以爲歌舞八音之節。所以平情導和。通神明。合天人。通倫理者也。示之。説文云。示天垂象見吉凶。所以示人也。从二三垂日月星也。聖人垂教。亦如此。故曰示之。之指教而言。好惡謂好至徳惡悖徳也。中心有好至徳

興すとは感發する所あつて興起するを謂ふ。譬へば寐ねたる者の驚く所あつて寤め起るが如し。行とはいはゆる民の行なり。讓とは謙なり。敬と讓とはもと一徳にして表裏を相爲す。即ち上文のいはゆる愛敬親に事ふるに盡して、徳教百姓に加はり、四海に刑らるゝの敬なり。民は人なり。争はずとは和睦して怨みなきを謂ふ。之を導くとは、導くは啓迪するなり。之は教を指して言ふ。禮とは制度品節を謂ふ。以て嫌を別ち微を明かにし、鬼神を儼し制度を考へ、政を治め君を安んずる所なり。樂に五聲十二律あり、更唱へ迭に和し、以て歌舞八音の節をなす。情を平にし和を導き神明に通じ天人を合せ倫理を通ずるところの者なり。之を示すとは、説文に云く示は天象を垂れ吉凶を見はす、人に示すゆゑなり。二三に従ふ、日月星を垂るゝなりと。聖人の教を垂るゝも亦此の如し。故に之に

禮は嫌を別ちより君を安んずる所なりに至る、禮記禮運篇の語。鬼神を儼す、岡田氏本儼の字に賓を導くなり、又敬するなりの傍訓あり。交はるに禮を以てするを儼といふ。



之實。則其所以加賞者。皆是受用至德之人也。中心有惡悖德之實。則其所以施刑者。盡是悖德之人也。此之謂示之以好惡。民知禁。民人也。禁止也。知禁謂民恥于不善。而知禁止非心。

示すといふ。之は教を指して言ふ。好惡は至德を好み悖德を惡むを謂ふ。中心に至德を好むの實あるときは、則ち其の賞を加ふるゆるゑんの者皆これ至德を受用する人なり。中心に悖德を惡む實あるときは、則ち其の刑を施すゆるゑんの者盡くこれ悖德の人なり。此を之を示すに好惡を以てすといふ。民禁を知るとは民は人なり。禁は止なり。禁を知るとは民不善を恥ぢて非心を禁止するを知るを謂ふ。

詩云。赫々師尹。民具爾瞻。

詩に云く、赫々たる師尹、民具に爾を瞻ると。

詩小雅節南山之篇。赫々明盛貌。師大師。官名。周三公之一也。尹其時居大師官人之氏也。民具爾瞻。民万民也。具皆也。爾女也。言在上者人所瞻仰。而上行下效。甚易而速也。而又包垂戒之意。

詩は小雅節南山の篇なり。赫々は明盛の貌。師は大師なり、官の名、周の三公の一なり。尹は其の時大師の官に居りし人の氏なり。民ともに爾を瞻るは、民は萬民なり。具には皆なり。爾は女なり。上に在る者は人の瞻仰する所にして、上行ひ下效ふこと甚だ易くして速かなるを言ふ。而して又戒を垂るゝ意を包ぬ。

詩に云く、此の詩大學にも引かる。大學にては惡人の意にとつて其の例に引かる。三公、尙書周官、太師太保を立つ。

孝治の章第九

昔者明王之以孝治天下也。下敢遺小國之臣。而況於公侯伯子男乎。故得萬國之懽心以事其先王。

昔明王の孝を以て天下を治むるには、敢て小國の臣を遣れず。しかるを況や公侯伯子男に於てをや。故に萬國の懽心を得て以て其の先王に事へまつる。

昔者指古先盛世而言。凡曰昔者者。其意有二。一以爲證。示可尊信之義。一以示戒懼而可知所取法也。明王。易曰。大人與日月合其明。日月之容光照臨于六合。聖人之德輝亦光被于四表。故曰明。明王即發端先王也。以代言之謂之先王。以德言之。則爲明王。不曰聖王。而曰明王者。所以示其聖神功化。光明四通。不可尙之本然也。經所

昔は古先の盛世を指して言ふ。凡そ昔といふもの其の意二あり。一は以て證となし、尊信すべき義を示す。一は以て戒懼して法を取る所を知る可きを示す。明王とは易に曰く大人は日月と其の明を合すと。日月の容光六合を照臨す。聖人の德輝も亦四表に光被す。故に明といふ。明王は即ち發端の先王なり。代を以て之を言ひて之を先王と謂ひ、德を以て之を言ふときは、則ち明王と爲す。聖王といはずして、明王といふものは、以て其の聖神の功化、光明四もに通じ、尙ふべからざる本然を示す所なり。經にいへる孝悌の至りは神

日月の容光、孟子盡心上、日月明あり、容光必ず照す。光を容るべきすきあれば必ずてらす。四表に光被す、尙書堯典の語。



謂孝悌之至。通于神明。光于四海。无所不通者是也。以孝治天下。經所謂愛敬盡于事親。而德教加于百姓。刑於四海者是也。只不曰治天下。而曰以孝治天下者。所以明非明王。則不能以孝治。縱雖有幸致治者。不以孝。則悖德悖禮而不足貴。而非王道也。不敢遺。遺忽忘也。不遺者愛也。不敢者敬也。即上文所謂愛親者。不敢惡於人。敬親者。不敢慢於人是也。小國之臣謂附庸之國主也。土地徧小。不能五十里。附于諸侯。曰附庸。吳子曰。小國之臣子男之卿大夫也。子男五十里爲小國。伯七十里爲次國。

明に通じ、四海にあきらかに通ぜざる所なしといふもの是なり。孝を以て天下を治むとは、經にいへる愛敬親に事ふるに盡して、徳教百姓に加はり、四海に刑らるといふもの是なり。只天下を治むといはずして、孝を以て天下を治むといふは、以て明王に非ざるときは、則ち孝を以て治むること能はず、たとひ幸に治を致す者ありといへども、孝を以てせざるときは、則ち悖徳悖禮にして貴ぶに足らず、王道に非ざるを明かにする所なり。敢て遺れずとは、遺るゝは忽忘するなり。遺れざるは愛なり、敢てせざるは敬なり。即ち上文にいへる親を愛する者は敢て人を惡まず、親を敬する者は敢て人を慢らざる是なり。小國の臣とは附庸の國主を謂ふ。土地徧小にして五十里なること能はず諸侯に附くを附庸といふ。吳子曰く小國の臣とは子男の卿大夫なり。子男は五十里小國たり。伯は七十里次國

吳子云く、元の吳澄文正公較定今古文自註の語。孝經大全中にあり。下同じ。

公侯百里爲大國。愚按二說雖於理无害。而前說爲穩當也。况譬擬也。公侯伯子男五等之諸侯也。孟子曰。公一位。侯一位。伯一位。子男同位。公侯皆方百里。伯七十里。子男五十里。凡四等。不能五十里。不達於天子。附於諸侯。曰附庸。疏曰。公者正也。言正行其事。侯者候也。言斥候而服事。伯者長也。爲一國之長也。子者字也。言字愛於小人也。男者任也。言任王之職事也。得保而不失之意。下放此。萬國猶言万方。是舉多而言之。不必數滿於萬也。懼與經所謂敬其父。則子悅之悅同。孟子所謂以德服人

たり。公侯は百里大國たりと。愚按するに二説理に於て害なしといへども、而も前説を穩當となす。況やは譬擬するなり。公侯伯子男は五等の諸侯なり。孟子曰く公一位、侯一位、伯一位、子男同じく一位なり。公侯は皆方百里、伯は七十里、子男は五十里、凡そ四等なり。五十里なること能はずして天子に達せず諸侯に附くを附庸といふと。疏に曰く公は正なり、正しく其の事を行ふを言ふ。侯は候なり、斥候して事に服するを言ふ。伯は長なり、一國の長たるなり。子は字なり、小人を字愛するを言ふ。男は任なり、王の職事に任ずるを言ふと。得とは保つて失はざる意なり。下此に放へ。萬國とは猶萬方と言はんがごとし。是は多きを舉げて之を言ふ。必ずしも數萬に滿たざるなり。懼ふとは經にいへる其の父を敬するときは、則ち子悦ぶの悦ぶと同じ。孟子にはゆる徳を以て人を服する者は中

孟子曰く、萬章下篇。

孟子にはゆる、公孫丑上篇。



者。中心悅而誠服也。下放此。以事其先王。以以得萬國之懼心也。其指明王而言。疏云。經先王有六焉。一曰先王有至德。二曰非先王之法服。三曰非先王之法言。四曰非先王之德行。五曰先王見教之可以化民。此皆指先代行孝之王。此章云以事其先王。則指行孝王之考祖。吳子曰。天子無生親可事。故曰以事其先王。

治國者不敢侮於鰥寡。而況於士民乎。故得百姓之懼心以事其先君。

侮謂慢忽之。而不矜恤。不侮愛也。不敢敬也。上文所謂不驕制節謹度

心悅んで誠に服するなり。下此に放へ。以て其の先王に事へまつるとは、以てとは萬國の懼ぶ心を得るを以てするなり。其のとは明王を指して言ふ。疏に云く經の先王に六あり。一に曰く先王至徳ありと。二に曰く先王の法服に非すと。三に曰く先王の法言に非すと。四に曰く先王の德行に非すと。五に曰く先王の教の以て民を化すべきを見ると。此れ皆先代孝を行へる王を指す。此の章に以て其の先王に事へまつるといふは、則ち孝を行ふ王の考祖をさす。吳子曰く天子は生親の事へまつるべきなし。故に以て其の先王に事へまつるといふと。

國を治むる者は敢て鰥寡を侮らす。しかるを況や士民に於てをや。故に百姓の懼ぶ心を得て以て其の先君に事へまつる。

侮るとは之を慢忽にして矜恤まざるを謂ふ。侮らざるは愛なり。敢てせざるは敬なり。上文にいへる驕ら

是也。鰥寡。老而無妻曰鰥。老而無夫曰寡。舉此二者以包无告窮民。士民。一命以上爲士。民則庶人也。諸侯有卿大夫。只言士民。亦舉小以見大耳。百姓通百官族姓士民鰥寡而言。以以得百姓之懼心也。其指治國者而言。吳子曰。諸侯亦無生親可事。故曰以事其先君。

治家者。不敢失於臣妾。而況於妻子乎。故得人之懼心以事其親。

治家者謂卿大夫及士庶人。治家以孝治其家也。失謂不得其心也。不失者愛也。不敢失者敬也。上文所

す、節を制し、度を謹む是なり。鰥寡は老いて妻無きを鰥といひ、老いて夫なきを寡といふ。此の二者を舉げて以て告ぐるなき窮民を包ぬ。士民とは一命以上を士となす。民は則ち庶人なり。諸侯に卿大夫あるに只士民といふは亦小を舉げて以て大を見はすのみ。百姓は百官族姓士民鰥寡を通じて言ふ。以てとは百姓の懼ぶ心を得るを以てするなり。其のとは國を治むる者を指して言ふ。吳子曰く諸侯も亦生親の事へべきなし。故に以て其の先君に事へまつるといふと。家を治むる者は敢て臣妾をも失はず。しかるを況や妻子に於てをや。故に人の懼ぶ心を得て以て其の親に事ふ。

家を治むる者とは卿大夫及び士庶人を謂ふ。家を治むとは孝を以て其の家を治むるなり。失ふとは其の心を得ざるを謂ふ。失はざる者は愛なり。敢て失はざる者



謂不敢毀傷立身行道是也。疏云。明王言不敢遺小國之臣。諸侯言不敢侮於鰥寡。大夫言不敢失於臣妾者。劉鈺云。遺謂意不存錄。侮謂忽慢其人。失謂不得其意。小國之臣位卑。或簡其禮。故曰不敢遺也。鰥寡人中賤弱。或被入輕侮欺陵。故曰不敢侮也。臣妾營事產業。宜須得其心力。故曰不敢失也。臣妾疏云。臣妾是奴婢。家之賤者也。妻子是家之貴者。人包妻子臣妾一家之人而言。以事其親。以以得人之權心也。其指治家者而言。親父母也。疏云。天子諸侯繼父而立。故言先王先君也。大夫唯賢是授。

は敬なり。上文いはゆる敢て毀ひ傷らす身を立て道を行ふ是なり。疏に云く明王に敢て小國の臣を遺れずと言ひ、諸侯に敢て鰥寡をも侮らすと言ひ、大夫に敢て臣妾をも失はずと言ふ者は、劉鈺云く遺るとは意に存録せざるを謂ひ、侮るとは其の人を忽にし慢るを謂ひ、失ふとは其の意を得ざるを謂ふ。小國の臣は位卑し。或は其の禮を簡にす。故に敢て遺れずといひ、鰥寡は人中の賤弱にして或は人に輕侮欺陵せらる。故に敢て侮らすといふ。臣妾は事を營み業を産す。宜しく須らく其の心力を得べし。故に敢て失はずといふと。臣妾とは、疏に云く臣妾はこれ奴婢、家の賤者なり。妻子はこれ家の貴者なりと。人は妻子臣妾一家の人を包ねて言ふ。以て其の親に事ふとは、以てとは人の權ぶ心を得るを以てするなり。其のとは家を治むる者を指して言ふ。親は父母なり。疏に云く天子諸侯は父に繼いで立つ。故に先王先君といふ。大夫は唯賢にこれ授く。位に居る時或は俸祿以て親に逮ぶあり。故に其の親といふと。

居位之時。或有俸祿以逮於親。故言其親也。

で立つ。故に先王先君といふ。大夫は唯賢にこれ授く。位に居る時或は俸祿以て親に逮ぶあり。故に其の親といふと。

夫然。故生則親安之。祭則鬼享之。是以天下和平。災害不生。禍亂不作。故明王之以孝治天下也如此。

夫れ然り。故に生けるときは、則ち親之を安んじ、祭るときは、則ち鬼之を享く。是を以て天下和平にして災害生せず、禍亂作らず。故に明王の孝を以て天下を治むること此の如し。

夫然。董氏曰。夫然猶言惟其如此也。生謂父母存時也。親謂生親也。安謂其心無憂也。所謂舜盡事親之道。而瞽瞍底豫是也。之指子之孝行而言。祭謂親沒後奉祀也。鬼。人死曰鬼。享之。享饗通。謂其鬼神來格。而歆饗其祭也。之字指祭禮之誠敬而言。天下和平。舉天下。

夫れ然りとは、董氏曰く夫れ然りとは猶た、それ此の如しと言ふがごとしと。生けるときは父母存する時を謂ふ。親は生親を謂ふ。安んずとは其の心憂無きを謂ふ。いはゆる舜親に事ふる道を盡して、瞽瞍を底すといふ是なり。之とは子の孝行を指して言ふ。祭るとは親沒して後奉祀するを謂ふ。鬼とは人死するを鬼といふ。之を享くとは、享くは饗くと通ず。其の鬼神來格して其の祭を歆饗するを謂ふ。之の字は祭禮の

董氏曰く、宋の人、朱文公刊誤董鼎注の文。孝經大全中にあり。

舜親に事ふる云々、孟子離婁上篇末章。



則國家在其中。和平謂各得愷心。而無乖戾偏頗也。災害。天災之甚者爲災害。星變水旱蝗疫之類。不生。災害自天降。故曰生。禍亂。人禍之甚者爲禍亂。寇賊奸宄兵戈弑父弑君之類。不作。禍亂出于人爲。故曰作。故連上之辭。明王之以孝治天下也如此。惣結上文。

詩云。有覺德行。四國順之。

詩大雅抑之篇。注云。覺大也。虞氏曰。覺悟也。愚按悟而後能大。大則能明悟。非有二義。覺德行即謂至德要道也。四國謂四方之國。

誠敬を指して言ふ。天下和平とは、天下を擧ぐるときは、則ち國家は其の中に在り。和平とは各愷ぶ心を得て乖戾偏頗なきを謂ふ。災害とは、天災の甚しき者を災害と爲す。星變水旱蝗疫の類なり。生ぜずとは、災害は天より降る、故に生ずといふ。禍亂とは人禍の甚しき者を禍亂となす。寇賊奸宄兵戈を弑し君を弑するの類なり。作らずとは、禍亂は人爲に出づ。故に作るといふ。故にとは上を連ぬる辭なり。明王の孝を以て天下を治むること此の如しとは上文を惣べ結ぶ。

詩に云く、覺なる德行あれば、四國之に順ふと。

詩は大雅抑の篇なり。注に云く覺は大なりと。虞氏曰く覺は悟なりと。愚按するに悟つて而して後能く大なり。大なるときは則ち能く明に悟る。二義あるに非ず。覺なる德行とは即ち至德要道を謂ふ。四國とは四方の國を謂ふ。之に順ふとは順ふは天下を順にする順と同じ。之は覺なる德行を指して言ふ。

注に云く孝經注疏の御注なり。虞氏曰く、前出の虞淳熙なり、孝經通言の本文には哲人有覺悟處と見ゆ。今之を變用するものなり。

順之。順與順天下之順同。之指覺德行而言。

方の國を謂ふ。之に順ふとは順ふは天下を順にする順と同じ。之は覺なる德行を指して言ふ。

聖治の章第十

曾子曰。敢問。聖人之德其無以加於孝乎。

敢進取而無所憚之意也。曾子因夫子之教。而已雖知孝德之全體至大而無外。而融化未盡。而不能無毫髮之凝滯。故所以敢問也。聖人之德。易曰。大人與天地合其德。故曰天是大底聖人。聖人是小底天。無以加於孝乎。加増也。言聖人之德至大。而天下莫能載。則猶可有增加於孝德之上也。

曾子曰く敢て問ふ聖人の德それ以て孝に加ふることなきかと。

敢てとは進み取つて憚る所なき意なり。曾子夫子の教に因つて、已に孝德の全體至大にして外なきを知ると雖も、而も融化未だ盡きずして毫髮の凝滯なきこと能はず。故に敢て問ふゆゑなり。聖人の德とは、易に曰く大人は天地と其の德を合すと。故に天はこれ大底の聖人、聖人はこれ小底の天なりといふ。以て孝に加ふることなきかとは、加ふは増すなり。言ふことろは聖人の德至大にして、天下も能く載するなきときは、則ち猶孝德の上に増加することあるべきがごとしとなり。

天はこれ大底の聖人、聖人はこれ小底の天なり、先生の造句にして又愛用せらるゝところ。



子曰。天地之性。人爲貴。人之  
行莫大於孝。

天地之性人爲貴。言天地之所性。  
乃是人也。故萬物之首靈。而爲至  
貴而無對也。禮運所謂人者其天地  
之德。唐氏所謂人者天地之心。天  
地有人。如人腹內有心是也。此人  
字指聖人而言。與所謂仁者人之  
人同。人之行人極也。即上文所謂  
人之行也。莫大於孝。孝德全體充  
塞于太虛。太虛廓廓而無外。則莫  
大之義不言而昭然矣。

孝莫大於嚴父。嚴父莫大於配天。  
則周公其人也。

子曰く天地の性は人を貴しとなす。人の行は孝  
より大なるはなしと。

天地の性は人を貴しとなすとは、言ふこゝろは、天地  
の性とする所は、乃ちこれ人なり。故に萬物の首靈に  
して至貴にして對なしと爲す。禮運にいはゆる人はそ  
れ天地の徳、唐氏のいはゆる人は天地の心なり。天地  
に人あるは人の腹内に心あるが如しといふ是なり。此  
の人の字は聖人を指して言ふ。いはゆる仁は人なりの  
人と同じ。人の行とは人極なり。即ち上文のいはゆる  
人の行なり。孝より大なるはなしとは、孝徳の全體太  
虚に充塞す。太虚廓廓にして外なし。則ち莫大の義は  
言はずして昭然たるなり。

孝は父を嚴ぶより大なるはなく、父を嚴ぶは天  
に配するより大なるはなし。則ち周公其の人な  
り。

唐氏、明人唐樞の禮元  
刺語、性理會通續目  
の文。  
人極、全集卷三原人中  
に出づ。人の規範た  
る大中至正の道をさ  
す。

嚴尊也。孝之全體雖充塞于太虚。  
而其實體備于人。而感而遂通天下  
之故。其感通之本在于嚴父。而嚴  
父之至。通于神明。光于四海。無  
所不通。所以復充塞于太虚之本體。  
只在茲。故曰孝莫大于嚴父。配合  
也。以所以事天之道事其親。此之  
謂配天。孟子曰。存其心。養其性。  
所以事天也。即首章不敢毀傷。立  
身行道全孝心法也。記曰。仁人之  
事親也。如事天。事天如事親。是  
故孝子成身。由是觀之。則雖行拜  
伏擊跪之敬。不以所以事天事其親。  
則非嚴父之至。故曰嚴父莫大于配  
天。必勿在郊祀宗祀上而講配天。

嚴ぶは尊ぶなり。孝の全體は太虚に充塞すといへど  
も、而も其の實體は人に備はり、而して感じて遂に天  
下の故に通ず。其の感通の本は父を嚴ぶに在り。而し  
て父を嚴ぶの至は神明に通じ四海に光に、通ぜざる  
所なし。太虚に充塞する本體に復するゆゑんのもの只  
こゝに在り。故に孝は父を嚴ぶより大なるはなしとい  
へり。配すとは合するなり。天に事ふるゆゑんの道を  
以て其の親に事ふ。これを天に配すと謂ふ。孟子に曰  
く、其の心を存し其の性を養ふは天に事ふるゆゑんな  
りと。即ち首章の敢て毀ひ傷らす、身を立て道を行ふ  
全孝の心法なり。記に曰く仁人の親に事ふること天に  
事ふるが如し。天に事ふること親に事ふるが如し。こ  
の故に孝子身を成すと。是に由つて之を觀るときは、  
則ち拜伏擊跪の敬を行ふと雖も天に事ふる所以を以て  
其の親に事へざるときは、則ち父を嚴ぶ至に非ず。故

不以所以事天、もと不  
の字天の字の下にあ  
り。今謹みて訂す。

記に曰く云々、禮記哀  
公問篇。



郊祀宗祀。只是配天之至極。而周公之所獨也。周公其人。周公文王之弟。武王之弟。成王之叔父。名且。采食于周。位居三公。故稱周公。其人猶言行嚴父配天之孝人也。得遂此心盡此禮。而極其至者。惟周公而已。故曰周公其人。此章專發明孝德全體之廣大。是以舉嚴父配天之廣大至極處而證之。非謂郊祀宗祀而爲配天。學者勿以辭害志也。

昔者周公郊祀后稷。以配天。宗祀文王於明堂。以配上帝。是以四海之內。各以其職來助祭。夫

に父を嚴ぶは天に配するより大なるはなしといへり。必ず郊祀宗祀の上に在つて天に配するを講ずる勿れ。郊祀宗祀は只これ天に配する至極にして周公の獨りする所なり。周公其人なりとは、周公は文王の子武王の弟成王の叔父、名は且といひ、周に采食し、位三公に居れり。故に周公と稱す。其の人とは猶父を嚴び天に配する孝を行ふ人と言ふがごとし。此の心を遂げ此の禮を盡して其の至を極むるを得る者はたゞ周公のみ。故に周公其人といへり。此の章専ら孝德全體の廣大なるを發明す。是を以て父を嚴び天に配する廣大至極の處を擧げて之を證す。郊祀宗祀を謂つて天に配すと爲すに非ず。學者辭を以て志を害すること勿れ。

天に配する至極、戸田氏本並に益田氏本に従ふ。

聖人之德。又何以加於孝乎。

后稷是周之始祖。郊謂冬至祀天於南郊之闕丘也。郊之祭也。必以后稷配之。故曰郊祀后稷以配天。不曰祭天。而惟云爾者。此專以明配天之義也。程子曰。萬物本乎天。人本於祖。故冬至祭天。而以祖配之。以冬至氣之始也。朱子曰。周公以萬物本乎天。文武之功本乎后稷。爲始祖而配天祀于郊。冬至者一陽始生。萬物之始。尊后稷猶尊天也。公羊傳云。郊則曷爲必祭稷。王者必以其祖配。王者則曷爲必以其祖配。自內出者。無主不行。自外至者。無主不止。言祭天。則天

り。それ聖人の德また何を以て孝に加へんや。

后稷はこれ周の始祖なり。郊すとは冬至に天を南郊の闕丘に祀るを謂ふ。郊の祭には必ず后稷を以て之に配す。故に后稷を郊祀して以て天に配すといへり。天を祭るといはずしてたゞ爾いふものは、此れ専ら以て天に配する義を明かにすればなり。程子曰く萬物は天に本づき、人は祖に本づく。故に冬至に天を祭つて祖を以て之に配す。冬至は氣の始なるを以てなり。朱子曰く周公萬物は天に本づき、文武の功は后稷に本づくを以て、始祖となして天に配して郊に祀る。冬至は一陽始めて生じ、萬物の始なれば、后稷を尊ぶこと猶天を尊ぶがごとくするなりと。公羊傳に云く郊には曷爲れど必ず稷を祭るか。王者は必ず其の祖を以て配すればなり。王者は曷爲れど必ず其の祖を以て配するか、内より出づる者主なければ行かず、外より至る者主な

程子曰く、二程遺書卷四、游定夫所錄中の語。

公羊傳、宣公三年の文なり。孝經注疏に引用せらる。主なければ行かず、公羊傳本文には主の字前句は匹の字なり。注疏本は主の字に作る。



神爲客。是外至也。須人爲主。天神乃至。故尊始祖以配天神。侑坐而食之。宗尊也。謂有功德可尊也。文王之功德至大。而非他宗之可比。故於明堂大享之祭配之。蓋此祭文王之所獨享。而爲百世不易之宗。是以曰宗祀。明堂者。天子布政之宮也。蓋所以明天氣統萬物。動法于兩儀。德被于四海者也。夏曰世室。殷曰重屋。姬曰明堂。此三代之名也。明堂天子大廟。所以宗祀其祖以配上帝。東曰青陽。南曰明堂。西曰愬章。北曰玄堂。中央曰太室。雖有五名。而以明堂太廟爲主。取其宗祀。則謂之清廟。

ければ止らざればなりと。天を祭ると言ふときは、則ち天神客たり。これ外より至る。須らく人主となり天神乃ち至るべし。故に始祖を尊んで以て天神に配し坐を侑めて之を食はしむ。宗は尊なり。功德あり尊ぶべきを謂ふ。文王の功德至大にして他宗の比す可き所に非ず。故に明堂大享の祭に於て之を配す。蓋し此の祭は文王の獨り享くる所にして、百世不易の宗たり。是を以て宗祀すといへり。明堂は天子政を布く宮なり。蓋し天氣を明かにし萬物を統べ、動は兩儀に法り、徳は四海に被らしむるゆるゑんの者なり。夏に世室といひ、殷に重屋といひ、姬に明堂といふ。此れ三代の名なり。明堂は天子の大廟、以て其祖を宗祀して以て上帝に配する所なり。東を青陽といひ、南を明堂といひ、西を愬章といひ、北を玄堂といひ、中央を太室といふ。五名ありといへども、明堂の太廟を以て主と爲す。

取其正室。則謂之太室。取其向陽。則謂之明堂。配上帝即配天也。以其徧覆無外。謂之天。以主宰造化。而尊無與竝。謂之上帝。其實一而已。陳氏曰。古者祭天於闕丘。掃地而行事。器用陶匏。牲用犢。其禮極簡。聖人之意以爲未足以盡其意之委曲。故於季秋之月。有大享之禮焉。天即帝也。郊而曰天。所以尊之也。故以后稷配焉。后稷遠矣。配稷於郊。亦以尊稷也。明堂而曰帝。所以親之也。以文王配焉。文王親也。配文王於明堂。亦以親文王也。尊尊而親親。周道備矣。然則郊者古禮。而明堂者周制也。

す。其の宗祀を取るときは、則ち之を清廟といひ、其の正室を取るときは、則ち之を太室といひ、其の陽に向ふを取るときは、則ち之を明堂といふ。上帝に配すとは即ち天に配するなり。其の徧覆外なきを以て之を天と謂ひ、造化を主宰して尊とも並ぶなきを以て之を上帝と謂ふも、其の實は一のみ。陳氏曰く、古天を闕丘に祭り地を掃つて事を行ふ。器は陶匏を用ひ、牲は犢を用ふ。其の禮極めて簡なり。聖人の意におもへらく未だ以て其の意の委曲を盡すに足らずと。故に季秋の月に於て大享の禮あり。天は即ち帝なり。郊にして天といふは之を尊ぶゆるゑなり。故に后稷を以てこれに配す。后稷は遠ければなり。稷を郊に配するは亦以て稷を尊ぶなり。明堂にして帝といふは之を親むゆるゑなり。文王を以てこれに配す。文王は親しければなり。文王を明堂に配するは亦以て文王を親むなり。

陳氏曰く、宋詳。下の王氏曰くと共に拙稿藤樹學源流考參看。陶匏、かはらけとひさご。犢、こうし。



周公以義起之也。王氏曰。郊以祀天。廟以事祖禰。三代之達禮也。明堂以享帝則非郊。以享親非廟。夏商所未有也。而周始爲之。故夫子曰。昔者周公郊祀后稷以配天。宗祀文王于明堂以配上帝。武王之伐商而歸也。祀明堂以教民知孝。其禮行于朝覲耕籍養老之先。而嚴父配天之義。夫子不屬之武王。而屬之周公者。蓋明堂之禮。武王主其事而行之。其制度。則周公明其義而爲之也。夫義者禮之質也。故禮雖先王未之有。而可以義起。周公達于義者也。其在周頌。思文后稷配天之樂章也。我將祀文王于明

尊を尊びて親を親む、周道備はれり。然るときは則ち郊は古禮にして明堂は周制なり。周公義を以て之を起せりと。王氏曰く、郊には以て天を祀り、廟には以て祖禰に事ふ。三代之達禮なり。明堂に以て帝を享するときは則ち郊に非ず。以て親を享するときは廟に非ず。夏商の未だ有らざりし所にして、周始めて之を爲せり。故に夫子曰く昔者周公后稷を郊祀して以て天に配し、文王を明堂に宗祀して以て上帝に配すと。武王の商を伐つて歸るや、明堂に祀つて以て民をして孝を知らしむ。其の禮朝覲耕籍養老の先に行はれたり。而して父を嚴びて天に配する義は、夫子之を武王に屬せずして之を周公に屬するものは、蓋し明堂の禮は武王其の事を主つて之を行へども、其の制度は則ち周公其の義を明かにして之を爲せり。夫れ義は禮の質なり。故に禮は先王未だこれあらずと雖も、而も義を以て起

王氏曰く、未詳。祖禰、祖先の廟と父の廟。

耕籍、禮記月令に三公九卿諸侯大夫を帥めて躬から帝藉に耕す、天子は三推し三公は五推し、卿諸侯は九推すと見えたり。帝藉は蓋し南郊に在り、藉は借るなり、民の力を借りて治むる所の田なり。

堂之樂章也。詩之國風。始于關雎。小雅始于鹿鳴。大雅始于文王。頌始于清廟。皆文王之詩也。關雎有王者之化。鹿鳴有王者之政。大雅始于文王。則受命作周矣。頌始于清廟。則盛德有百世之祀矣。武王之伐商也。誓于孟津。誓于牧野。其伐商而歸也。告于羣后。無以文王爲言。則王業成于武王。而所以成之者文王也。配天於郊。則不可以二太祖之尊。蒸嘗于廟。則不足以明文王之德。是故宗祀明堂以配上帝。此義之所當然。禮之所從起。而非厚于其禰也。是以指其孝行之皆極其至而言。四海之內謂四方六

すべし。周公は義に達せる者なり。其の周頌に在つては思文は后稷天に配する樂章なり。我將は文王を明堂に祀る樂章なり。詩の國風は關雎に始まり、小雅は鹿鳴に始まり、大雅は文王に始まり、頌は清廟に始まる。皆文王の詩なり。關雎は王者の化あり。鹿鳴は王者の政あり。大雅の文王に始まるは則ち命を受けて周を作せばなり。頌の清廟に始まるは則ち盛德百世の祀あればなり。武王の商を伐つや孟津に誓ひ牧野に誓ひたり。其の商を伐つて歸るや羣后に告ぐるに文王を以て言を爲さざるはなし。則ち王業は武王に成りしも、而も之を成すゆゑんものは文王なればなり。天に郊に配するときは、則ち二太祖の尊を以てす可からず、廟に蒸嘗するときは、則ち以て文王の德を明かにするに足らず。この故に明堂に宗祀して以て上帝に配したり。此れ義の當に然るべき所、禮のよつて起りし所

蒸嘗、爾雅釋天に、秋の祭を嘗といひ、冬の祭を蒸といふ。



服諸侯也。各以其職來助祭。各指諸侯。其亦指諸侯而言。職謂其土物之貢及助祭之職分也。祭泛指祭祀。而重郊祀宗祀。疏云。各以其職來助祭者。四海之內六服之諸侯。各脩其職貢方物也。按周禮大行人以九儀辨諸侯之命。廟中將幣三享。又曰。侯服貢祀物。鄭云。犧牲之屬。甸服貢嬪物。註云。絲帛也。男服貢器物。註云。尊彝之屬也。采服貢服物。註云。玄纁絺纈也。衛服貢材物。註云。八材也。要服貢貨物。註云。龜貝也。此是六服諸侯。各脩其職來助祭。又若尙書武成篇云。丁未祀於周廟。邦甸侯衛

にして、其の禰に厚くするに非ざるなりと。是を以てとは其の孝行の皆其の至を極むるを指して言ふ。四海の内とは四方六服の諸侯を謂ふ。各其の職を以て來つて祭を助くとは、各は諸侯を指す。其のも亦諸侯を指して言ふ。職とは其の土物の貢と助祭の職分とを謂ふ。祭は泛く祭祀を指し、しかも郊祀と宗祀とを重んず。疏に云く、各其の職を以て來りて祭を助くとは、四海の内六服の諸侯各其の職を脩め方物を貢するなり。按ずるに周禮大行人に九儀を以て諸侯の命を辨す。廟中幣を將ふ三享すと。又曰く侯服は祀物を貢す。鄭云く犧牲の屬なりと。甸服は嬪物を貢す。註に云く絲帛なりと。男服は器物を貢す。註に云く尊彝の屬なりと。采服は服物を貢す。註に云く玄纁絺纈なりと。衛服は材物を貢す。註に云く八材なりと。要服は貨物を貢す。註に云く龜貝なりと。此はこれ六服の諸

六服、邦畿千里、其の外五百里侯服、其の外五百里甸服、其の外五百里男服、其の外五百里采服、其の外五百里衛服、其の外五百里要服。

九儀、公侯伯子男の五等と孤卿大夫士の四等と合して、九儀なり。幣をおこなふ、三享とも東帛に璧を加ふ。三享は三獻なり。玄纁、玄は黒、纁は絳。絺、精製の葛と綿。

籩豆。籩は竹器、其の實は四升を容る。豆は木製、古肉を食ふ器。

駿奔走執籩豆。亦是助祭之義也。夫聖人之德又何以加於孝乎。孝德本充塞太虛。太虛廓廓而無外。故雖聖人之峻德。充孝德本然之量而已。故曰。聖人之德又何以加于孝乎。

故親生之膝下以養。父母日嚴。聖人因嚴以教敬。因親以教愛。聖人之教。不肅而成。其政不嚴而治。其所因者本也。

親生之膝下。親愛也。生謂生々活潑也。膝下謂下胎一聲啼叫時。言母子分娩在膝下。一聲啼叫時。而

侯各其の職を脩めて來つて祭を助くるなり。又尙書武成篇に丁未周廟に祀り、邦甸侯衛駿に奔走して籩豆を執るといへるが若きも亦これ助祭の義なりと。夫れ聖人の德又何を以て孝に加へんやとは、孝德もと太虛に充塞す。太虛は廓廓にして外なし。故に聖人の峻德と雖も、孝德本然の量を充すのみ。故に聖人の德又何を以て孝に加へんやといへり。

故に親しみ之を膝下に生じて以て養はれて、父母日に嚴なり。聖人嚴に因つて以て敬を教へ、親に因つて以て愛を教ふ。聖人の教、肅ならずして成り、其の政嚴ならずして治まる。其の因る所の者本なればなり。

親しみ之を膝下に生ずとは、親しみは愛なり。生ずとは生々活潑なるを謂ふ。膝下とは下胎一聲啼叫の時を謂ふ。母子分娩して膝下にあり、一聲啼叫の時にし



既至德之親愛感通。而生々活潑々地也。所謂赤子之心是也。以養父母日嚴。以至德感通生于膝下也。養育也。與萬物育之育字同意。謂因鞠育。而形神共生育而成長也。父母日嚴。謂心之所思也。言以至德感通既生于膝下。隨形長神發。則敬親之良知日新。而其心之所思。父母日嚴也。聖人。疏云。聖人謂明王也。聖者通也。稱明王者。言在位無不照也。稱聖人者。言用心無不通也。因嚴以敬。因親以愛。因者順其固有。而開導之意也。嚴。以養父母日嚴之嚴。親。親生之膝下之親。人々固有之良知良能

て、既に至德の親愛感通して生々活潑々地なるを言ふ。いはゆる赤子の心これなり。以て養はれて父母日に嚴なりとは、以てとは至德の感通膝下に生ずるを以てするなり。養は育なり。萬物育すの育の字と同意なり。鞠育に因つて形神共に生育して成長するを謂ふ。父母日に嚴なりとは心の思ふ所を謂ふ。言ふこゝろは至德の感通既に膝下に生ずるを以て、形長じ神發するに隨ふときは、則ち親を敬する良知日に新にして、其の心の思ふ所、父母日に嚴なるなり。聖人とは、疏に云く聖人とは明王を謂ふ。聖は通なり。明王と稱する者は位に在つて照さざるなきを言ふ。聖人と稱するは心を用ひて通ぜざることを言ふ。嚴に因つて以て敬を教へ、親に因つて以て愛を教ふとは、因るは其の固有に順つて開導する意なり。嚴とは、以て養はれて父母日に嚴なりの嚴なり。親とは親しみ之を膝下に生ず

赤子の心、孟子に、大人は其の赤子の心を失はざる者なり。至德の感通、孝の形而上學的存在が、日常の生活に發顯するをいふ。萬物育す、中庸天地位し、萬物育す。

良知、後文良能と並舉す。孝經を體察して愛敬の至心と孟子の良知良能とを同一視したるものなり。陽明學に入らずして既に此の證悟あるは注意すべし。

也。所教之敬愛。即首章不敢毀傷。立身行道之愛敬也。嚴也親也敬也愛也。非有二。但有大小精粗之異而已。人之常情。挾恩恃愛。而易失于不敬。故先敬而後愛。因嚴以敬。因親以愛。猶因有穀種之生意而播種也。宜體認。其所因者本也。其指政教而言。本謂三才一貫之大本。經所謂孝德之本。中庸所謂中也者天下之大本也是也。

るの親なり。人々固有の良知良能なり。教ふる所の敬愛は、即ち首章の敢て毀ひ傷らす、身を立て道を行ふ愛敬なり。嚴や親や敬や愛や二あるに非ず。たゞ大小精粗の異なるのみ。人の常情は恩を挾み愛を恃んで、不敬に失し易し。故に敬を先きにして愛を後にせり。嚴に因つて以て敬を教へ、親に因つて以て愛を教ふるは、猶穀種の生意あるに因つて播種するがごとくなり。宜しく體認すべし。其の因る所の者本なればなりとは、其のとは政教を指して言ふ。本とは三才一貫の大本を謂ふ。經にいはゆる孝は德の本なり。中庸にいはゆる中なるものは天下の大本なりといへるもの是なり。

父母生續の章第十一及び孝優秀の章第十二

父子之道。天性也。君臣之義也。父母生之。續莫大焉。君親臨之。

父子の道は天性なり。君臣の義なり。父母之を生ず。續ぐことこれより大なるはなし。君親と

眞蹟戸田氏本も益田氏本も皆厚きことこれより重きはなしの上を第十一とし其の親を愛せず以下を第十第二章とする古文孝經の分段落法に從はず、上下を連記す。



厚莫重焉。故不愛其親。而愛他人者。謂之悖德。不敬其親。而敬他人者。謂之悖禮。

父子之道即孝也。父之愛子。本所以事其親也。故慈亦孝行之一端也。天性天命之眞性也。言父子之道生于膝下。而日嚴。乃是天之所以命人之眞性。而不可不畏敬而保合也。君臣之義。君以仁使臣。臣以忠義事君。此之謂君臣之義。父尊子卑。有君臣之象也。父慈子孝。即仁忠之本也。易曰。家人有嚴君焉。父母之謂也。大學曰。孝者所以事君也。慈者所以使衆也。此之謂也。

して之に臨む。厚きことこれより重きはなし。故に其親を愛せずして他人を愛する者、之を悖德と謂ひ、其の親を敬せずして他人を敬する者、之を悖禮と謂ふ。

父子の道とは即ち孝なり。父の子を愛するは、もと其の親に事ふるゆゑなり。故に慈も亦孝行の一端なり。天性とは天命の眞性なり。言ふこゝろは、父子の道は膝下に生じて日に嚴し。乃ち是れ天の人に命するゆゑの眞性にして、畏敬して保合せざるべからず。君臣の義なりとは、君は仁を以て臣を使ひ、臣は忠義を以て君に事ふ。これを君臣の義と謂ふ。父は尊く、子は卑し。君臣の象あり。父は慈に子は孝なるは、即ち仁忠の本なり。易に曰く家人嚴君あり。父母の謂なりと。大學に曰く孝は君に事ふるゆゑなり。慈は衆を使ふゆゑなりとは、これをこれ謂ふなり。言ふこゝろ

續ぐこと云々、古文の續の字に従はず、續の字に従へるは注意すべし。

易に曰く、家人の卦の象辭なり。

言君臣之義。所以行其孝也。天下之道。不待他求也。舉君臣之義。包夫婦之別。長幼之序。朋友之信也。父母生之。續莫大焉。生生育也。之指子而言。續連也。謂相連不絶也。言人之子資始于父。而資生于母。其心性形体相連續而不絶。猶木之根幹枝葉一體而不相離也。連續之至密。天下豈有加于此乎。故曰續莫大焉。君親臨之。厚莫重焉。親父母也。以尊適卑曰臨。覆育之意也。之指子而言。厚重也。廣也。謂仁愛重廣也。天下之至尊。無大乎君。天下之至親。無大乎父母。而兼之者父母也。兼天下莫大

は、君臣の義は其の孝を行ふゆゑなり。天下の道は他に求むるを待たず。君臣の義を擧げて、夫婦の別、長幼の序、朋友の信を包ぬ。父母之を生ず、續ぐことこれより大なるはなしとは、生ずとは生み育つるなり。之は子を指して言へり。續ぐとは連なるなり。相連つて絶えざるを謂へり。言ふこゝろは、人の子始を父に資り、生を母に資る。其の心性形体相連續して絶えざること、猶木の根幹枝葉一體にして相離れざるがごとし。連續の至密なること天下豈此に加ふるものあらんや。故に續ぐことこれより大なるはなしといへり。君親として之に臨む、厚きことこれより重きはなしとは、親は父母なり。尊を以て卑に適くを臨むといふ。覆育の意なり。之は子を指して言ふ。厚きは重きなり、廣きなり。仁愛の重く廣きを謂ふ。天下の至尊は君より大なるはなく、天下の至親は父母より大なるは



之恩義。而覆育其子。仁愛之廣大。昊天罔極。天下豈能加于此乎。故曰君臣臨之厚莫重焉。不愛其親。而愛他人者。謂之悖德。不敬其親。而敬他人者。謂之悖禮。不愛敬其親者。言不受用嚴父配天之心法也。他人指君臣夫婦兄弟子孫朋友而言。愛敬他人者。言無嚴父配天之真心。而假德禮之迹。而愛敬他人。如霸者假仁是也。吳子曰。悖逆也。由本及末爲順。舍本趨末爲逆也。其愛敬雖合於德禮之迹。而舍嚴父配天之本。從事於末。故曰悖德悖禮。

なし。而して之を兼ねたるものは父母なり。天下莫大の恩義を兼ねて其子を覆育す。仁愛の廣大なること昊天極なし。天下豈此に加へんや。故に君臣として之に臨む、厚きことこれより重きはなしといへり。其の親を愛せずして他人を愛する者、これを悖徳と謂ひ、其の親を敬せずして他人を敬する者、これを悖禮と謂ふ。其の親を愛敬せざる者とは父を嚴び天に配する心法を受用せざるを言ふ。他人とは君臣夫婦兄弟子孫朋友を指して言ふ。他人を愛敬する者とは父を嚴び天に配する真心なくして徳禮の迹を假りて他人を愛敬するを言ふ。霸者の仁を假るが如きはなり。吳子曰く悖は逆なり。本より末に及ぶを順となし、本を捨て、末に趨るを逆と爲すと。其の愛敬は徳禮の迹に合すと雖も、而も父を嚴び天に配する本を捨て、事に末に従ふ。故に悖徳悖禮といふ。

以順則。逆民無則焉。不在於善。而皆在於凶徳。雖得之。君子所不貴也。君子則不然。

以用也。順謂由嚴父配天之本。而愛敬天下之人倫也。則謂則而象之也。以順則。經所謂愛敬盡于事親。而徳教加于百姓。刑于四海是也。逆民無則。逆即悖徳悖禮也。民人無則。無則謂人心無徳義之則。所謂民免而無恥者也。不在於善。而皆在於凶徳。疏云。在謂心之所在也。善即嚴父配天之至善也。皆謂無所不至也。凶不吉也。凶徳即悖徳悖禮也。雖得之。之指其所求而言。得之。謂求民之所服從而得之也。

順を以ふれば則る。逆なれば民これに則ることなし。善に在らずして皆凶徳に在り。之を得と雖も君子貴ばざる所なり。君子は則ち然らず。以ふるは用ふるなり。順とは父を嚴び天に配する本よりして天下の人倫を愛敬するを謂ふ。則るとは、則つて之に象るを謂ふ。順をもちふれば則るとは、經にいはゆる愛敬親に事ふるに盡して徳教百姓に加はり四海に刑らるといふものはなり。逆なれば民則るなしとは、逆は即ち悖徳悖禮なり。民は人なり。則ることなしとは人心に徳義の則なきを謂ふ。いはゆる民免れて恥なきものなり。善に在らずして皆凶徳にありとは、疏に云く在りとは心の在る所を謂ふと。善とは即ち父を嚴び天に配する至善なり。皆とは至らざる所なきを謂ふ。凶は不吉なり。凶徳は即ち悖徳悖禮なり。之を得と雖もとは、之は其の求むる所を指して言ふ。之を

民免れて恥なし、論語爲政篇の語。



如覇者之服人是也。君子所不貴。君子謂聖賢。下同。不貴。賤惡之也。董子曰。仲尼之門。五尺童子。羞稱五霸。正此意也。君子則不然。不然謂無一毫悖德悖禮之心也。此下將說嚴父配天之順德。故設此一句。承上起下。

言斯可道。行斯可樂。德義可尊。作事可法。容止可觀。進退可度。以臨其民。是以其民畏而愛之。則而象之。故能成其德教。而行其政令。

言言語也。斯此也。語助辭。下同。道謂陳說也。以嚴父配天之德。而

得とは、民の服従する所を求めて之を得るを謂ふ。覇者の人を服するが如きものはなり。君子の貴ばざる所とは、君子は聖賢を謂ふ。下同。貴ばざるとは之を賤惡するなり。董子曰く仲尼の門、五尺の童子も五霸を稱するを羞づとは正に此の意なり。君子は然らず、然らずとは一毫も悖德悖禮の心なきを謂ふ。此の下將に父を嚴び天に配する順德を説かんとす。故に此の一句を設けて、上を承け下を起せり。

言はこれ道ふべく、行はこれ樂むべし。德義尊ぶべく、作事法るべし。容止觀るべく、進退度とすべし。以て其の民に臨む。こゝを以て其の民畏れて之を愛し、則つて之を象どる。故に能く其の德教を成して、其の政令を行ふ。

言は言語なり。斯は此なり。語助の辭なり。下同。道は陳說するを謂ふ。父を嚴び天に配する德を以て、

時然后言。則民莫不信。爲可陳說之法言。行斯可樂。行謂施行也。樂謂人悅服也。以嚴父配天之德。而時出之。則行而民莫不悅。而爲可悅服之德行也。經所謂敬一人而千萬人悅是也。德義可尊。尊謂敬信也。心法立嚴父配天之極。則不動而敬。不言而信。見而民莫不敬信。而爲可敬信之德義也。作事可法。作創作也。事業也。作事謂開物成務也。法則效也。聖人以嚴父配天之德。制作得其宜。天下萬世所則效也。故曰作事可法。容止可觀。容止威儀也。謂禮容所止也。觀謂人觀望而畏之也。以嚴父配天

時にして然る後に言ふときは、則ち民信せざることなくして、陳說すべき法言となるなり。行はこれ樂むべしとは、行は施行を謂ふ。樂むは人悅服するを謂ふ。父を嚴び天に配する德を以て時にして之を出すときは、則ち行つて民悦ばざるなくして、悅服すべき德行と爲るなり。經にいはゆる一人を敬して千萬人悦ぶといふ是なり。德義尊ぶべしとは、尊ぶは敬信するを謂ふ。心法に父を嚴び天に配する極を立つるときは、則ち動かさずして敬せられ、言はずして信ぜられ、見て民敬信せざるなくして、敬信すべき德義となるなり。作事法るべしとは、作は創め作すなり。事は事業なり。作事とは物を開き務を成すを謂ふ。法るは效ふなり。聖人父を嚴び天に配する德を以て制作其の宜しきを得、天下萬世に則り效はるゝなり。故に作事法るべしといへり。容止觀る可しとは、容止は威儀なり。禮容

物を開き務を成す。易繫辭上傳の語。



之德。正其容止。尊其瞻視。儼然人望而畏之。故曰容止可觀。進退可度。朱子曰。進退謂行藏也。進謂達而行道也。退謂窮而藏也。在堯舜。則陟位爲進。讓位爲退。度亦法也。聖人以嚴父配天之德。進退不失其時。其道光明。天下后世所法則也。故曰進退可度。以臨其民。以以可道等六事也。臨謂臨撫也。覆育之意也。其指天下國家而言。民人也。下同。畏而愛之。畏謂畏敬其神武也。愛謂愛戴其聖德也。之指君子而言。畏而愛之。如七十子之服孔子。畏敬之如神明。親愛之如父母。則而象之。則效法

の止る所を謂ふ。觀るとは人觀望して之を畏るゝを謂ふ。父を嚴び天に配する徳を以て、其の容止を正し、其の瞻視を尊くし、儼然人望んで之を畏る。故に容止可しといへり。進退度とすべしとは、朱子曰く、進退は行藏を謂ふと。進とは達して道を行ふを謂ひ、退とは窮して藏るゝを謂ふ。堯舜にあつては、則ち位に陟るを進となし、位を讓るを退と爲す。度も亦法なり。聖人父を嚴び天に配する徳を以て、進退其の時を失はず、其の道光みにして、天下後世に法り則らるゝなり。故に進退度と可しといへり。以て其の民に臨むとは、以てとは道ふ可き等の六事を以てするなり。臨むは臨撫するを謂ふ。覆育の意なり。其の天下國家を指して言ふ。民は人なり。下同じ。畏れて之を愛すとは、畏るは其の神武を畏敬するを謂ひ、愛すは其の聖徳を愛戴するを謂ふ。之は君子を指して言ふ。畏れ

朱子曰く朱鴻集解の意を取る。

也。象摹倣也。之指君子徳而言。則而象之。謂民日遷善而不知也。所謂芝蘭之化也。成其徳教。終其事曰成。其指君子而言。徳教即其所躬行心得之上文六事是也。行其政令。行謂施行也。其指君子而言。令命也。政令即以上文六事措天下事業者也。

詩云。淑人君子。其儀不忒。

詩曹風鳴鳩篇。淑人君子。淑善也。淑人君子重言者。深贊美之也。其儀不忒。其指君子而言。儀度也。

て之を愛するは、七十子の孔子に服するが如し。之を畏敬すること神明の如く、之を親愛すること父母の如きなり。則つて之に象るとは、則るは效ひ法るなり。象るは摹倣するなり。之は君子の徳を指して言ふ。則つて之に象るとは、民日に善に遷つて知らざるを謂ふ。いはゆる芝蘭の化なり。其の徳教を成すとは、其の事を終ふるを成すといふ。其の君子を指して言ふ。徳教は即ち其の躬に行ひ心に得る所の上文の六事これなり。其の政令を行ふとは、行ふは施行行ふを謂ふ。其の君子を指して言ふ。令は命なり。政令は即ち上文の六事を以て天下の事業に措く者なり。詩に云く、淑人君子は其の儀不忒と。

七十子の孔子に服す、孟子公孫丑上篇の語。

民日に善に遷る云々、孟子盡心上篇の語。芝蘭の化、孔子家語在厄篇に、芝蘭深林に生じて、人無きを以て芳しからずんばあらず。

詩は曹風鳴鳩の篇なり。淑人君子とは、淑は善なり。淑人と君子と重ね言ふものは深く之を贊美するなり。其の儀不忒とは、其の君子を指して言ふ。儀は度







如執玉。如奉盈。洞々屬々然。如弗勝。如將失之。嚴威儼恪。非所以事親也。又曰。下氣怡聲。問衣煖寒。又曰。問所欲而進之。柔色以溫之。皆是愛敬之真樂。見於面。益於背。施於四體。發於事業者也。病則致其憂。病疾也。憂謂以父母之病患爲己之疾痛苦楚也。吾身有疾痛苦楚。則必求其治療。慮其死亡甚切。故其心只在欲其病之速愈。而無一毫之他念也。移此心而以養父母之病。則終是致其憂者也。喪則致其哀。喪謂不幸親死服其喪。哀謂哀戚痛切也。祭則致其嚴。祭謂親沒而祭祀之。嚴謂誠敬精明也。

者は必ず愉色あり、愉色ある者は必ず婉容あり。孝子玉を執るが如く、盈ちたるを奉ぐるが如し。洞々屬々然として勝へざるが如く、將に之を失はんとするが如し。嚴威儼恪は親に事ふるゆゑんに非ずと。又曰く、氣を下し聲を怡せ衣の煖寒を問ふと。又曰く欲する所を問うて之を進め、色を柔けて以て之を温むと。皆これ愛敬の真樂にして、面に見はれ背に益れ四體に施き事業に發する者なり。病むときは則ち其の憂に致るとは、病は疾なり。憂は父母の病患を以て己の疾痛苦楚と爲すを謂ふ。吾が身疾痛苦楚あるときは、則ち必ず其の治療を求め其死亡を慮ること甚だ切なり。故に其の心只其の病の速に愈ゆるを欲するに在つて一毫の他念なし。此の心を移して以て父母の病を養ふときは、則ち終にこれ其の憂に致る者なり。喪には則ち其の哀に致るとは、喪は不幸親死し其の喪に服するを

婉容、柔和なるかたち。  
洞々屬々然、つゞしまやかにし又うやうやしくして專一のかたち。  
又曰く、上文の抑搔扶持の文と下文の欲する所云々の文と同じく内則の句。  
面に見はれ云々、孟子盡心上篇の語。

五者備。五者謂居則致其敬。養則致其樂。病則致其憂。喪則致其哀。祭則致其嚴也。備謂全具而不闕也。然後能事其親。然後指上文五備而言。能字有力。如有所未備。則非能事親也。

事親者。居上不驕。爲下不亂。在醜不爭。居上而驕則亡。爲下而亂則刑。在醜而爭則兵。三者不除。雖日用三牲之養。猶爲不孝也。

謂ふ。哀は哀戚の痛切なるを謂ふ。祭には其の嚴に致るとは、祭は親没して之を祭祀するを謂ふ。嚴は誠敬の精明なるを謂ふ。五者備はるとは、五者は居るときは則ち其の敬に致り養ふときは則ち其の樂に致り病むときは則ち其の憂に致り喪には則ち其の哀に致り祭には其の嚴に致るを謂ふ。備はるとは全く具つて闕けざるを謂ふ。然して後に能く其の親に事ふとは、然して後は上文の五備を指して言ふ。能の字力あり。もし未だ備らざる所あれば、則ち能く親に事ふるに非ず。親に事ふる者は上に居て驕らず。下として亂らず。醜に在つて争はず。上に居て驕るときは則ち亡び、下として亂るときは則ち刑せられ、醜に在つて争ふときは則ち兵せらる。三つの者除かずんば、日に三牲の養を用ふといへども猶不孝となすなり。



事親者。即五者備。而能事親者也。居上不驕。上謂位高年老才德長也。不可只作天子諸侯之位而看。雖匹夫。有居上之時。交妻子是也。最宜活看。驕字專可就心上看。有一毫自滿之心。即驕也。爲下不亂。下謂位卑年少才德短也。不可只作庶人之下位看。雖天子。有爲下之時。事父母是也。最宜活看。亂不理也。專可就心上看。有一毫不安分之心。即亂也。在醜不爭。醜類也。謂位年才德相類無高下也。爭謂好勝也。專可就心上看。有一毫好勝之心。即鬪爭也。亡謂取滅亡也。刑謂遭刑戮也。兵謂相及戕殺也。

親に事ふる者とは即ち五者備はつて能く親に事ふる者なり。上に居て驕らずとは、上は位高く年老い才徳長するを謂ふ。只天子諸侯の位と作して看る可からず。匹夫といへども上に居る時あり。妻子に交はるこれなり。最も宜しく活看すべし。驕るの字専ら心上に就いて看るべし。一毫自滿の心あれば即ち驕なり。下として亂らすとは、下は位卑く年少く才徳短きを謂ふ。只庶人の下位となして看るべからず。天子といへども下たる時あり。父母に事ふるこれなり。最も宜しく活看すべし。亂るは理らざるなり。専ら心上に就いて看るべし。一毫も分に安んぜざる心あれば即ち亂るなり。醜に在つて争はずとは、醜は類なり。位と年と才徳と相類して高下なきを謂ふ。争ふは勝を好むを謂ふ。専ら心上に就いて看るべし。一毫も勝を好む心あれば即ち鬪争するなり。亡ぶは滅亡を取るを謂ふ。刑せらる

也。亡刑兵。皆所以害仁殺身也。在上。故曰取滅亡。爲下。故曰遭刑戮。在醜。故曰相及。只因位立言而已。曰亡。曰刑。曰兵。假設其害之至而戒之。實專可就心上看。雖無亡刑兵之事。已有驕亂争之凶德。而害其仁。則與亡刑兵何以異乎。三者不除。三者謂驕亂争。不除謂不慎獨決去也。日用三牲之養。三牲謂牛羊豕。日用三牲之養。謂日日具盛饌以養親之口體也。猶字有深戒之意。以開示以不敢毀傷而養志爲主也。

とは刑戮に遭ふを謂ふ。兵せらるるとは相及し戕殺するを謂ふ。亡と刑と兵とは皆仁を害し身を殺すゆゑんなり。上に在り、故に滅亡を取るといふ。下となる、故に刑戮に遭ふといふ。醜に在り、故に相及すといふ。只位に因つて言を立つるのみ。亡といひ刑といひ兵といふは、其の害の至るを假設して之を戒む。實に専ら心上に就いて看るべし。亡刑兵の事なしと雖も、已に驕亂争の凶徳ありて其の仁を害するときは、則ち亡び刑せられ兵せらるゝと何を以て異ならんや。三者除かずとは、三者は驕亂争を謂ふ。除かずとは獨を慎みて決し去らざるを謂ふ。日に三牲の養を用ふとは、三牲は牛羊豕を謂ふ。日に三牲の養を用ふるは日日盛饌を具して以て親の口體を養ふを謂ふ。猶の字深く戒むる意あり。以て敢て毀ひ傷らずして志を養ふを以て主と爲すを開示せり。

不慎獨決去、不の字もと獨の下にあり、謹みて慎の上に移す。

口體を養ふ、志を養ふ、孟子離婁上篇、曾子の孝行を述ぶ。



五刑の章第十四

五刑之屬三千。而罪莫大於不孝。

五刑の屬三千にして、罪は不孝より大なるはなし。

五刑謂墨劓剕宮大辟也。墨刻額而  
澠之也。劓割鼻也。剕刑足也。宮  
淫刑也。男子割勢。婦人幽閉。幽  
閉閉於宮使不得出也。大辟死刑也。  
朱子曰。屬者條目也。三千謂墨罪  
之屬千條。劓罪之屬千條。剕罪之  
屬五百條。宮罪之屬三百條。殺罪  
之屬二百條。凡有三千條也。

五刑とは墨と劓と剕と宮と大辟とを謂ふ。墨は額を刻して之を澠にするなり。劓は鼻を割くなり。剕は足を割るなり。宮は淫刑なり。男子は勢を割き、婦人は幽閉す。幽閉とは宮に閉ちて出づるを得ざらしむるなり。大辟は死刑なり。朱子曰く屬とは條目なりと。三千とは墨罪の屬千條、劓罪の屬千條、剕罪の屬五百條、宮罪の屬三百條、殺罪の屬二百條。凡そ三千條あるを謂ふ。

要君者無上。非聖人者無法。非孝者無親。此大亂之道也。

君に要むる者は上を無し、聖人をそしる者は法を無し、孝をそしる者は親を無す。これ大亂の道なり。

要君。要要素也。要君謂失忠敬之

君に要むとは、要むは要素するなり。君に要むるは忠

心。而有索己所欲於君也。無上。

敬の心を失つて己が欲する所を君に索むるあるを謂

無者心不知有君。有而若無也。上  
即君也。無上謂無君事之心。而  
反其君弑其君也。非聖人。非非毀  
也。非聖人謂不尊信聖人也。所謂  
侮聖人之言是也。無法。法謂聖人  
中庸之法也。無法謂無守法之心。  
而敗棄聖法也。非孝者謂無愛敬之  
真心。而不篤信孝道也。無親謂無  
父事之之心。而遺其親弑其親也。  
大亂之道。窮人欲滅天理之至。无  
所以加。故謂大亂也。道謂所由行  
也。

ふ。上を無すとは、無するは心に君あるを知らず、有れども無きがごとくするなり。上は即ち君なり。上を無するは君として之に事ふる心なくして、其の君に反き其の君を弑するを謂ふ。聖人を非るとは、非るは非毀するなり。聖人を非るは聖人を尊信せざるを謂ふ。いはゆる聖人の言を侮るもの是なり。法を無すとは、法は聖人中庸の法を謂ふ。法を無するは法を守る心なくして聖法を敗棄するを謂ふ。孝を非るは愛敬の真心なくして、篤く孝道を信ぜざるを謂ふ。親を無すとは、父として之に事ふる心なくして其の親を遺れ其の親を弑するを謂ふ。大亂の道とは、人欲を窮め天理を滅すの至り、以て加ふる所なし。故に大亂と謂ふ。道は由り行く所を謂ふ。

聖人の言を侮る、論語季氏篇の語。

非と者との間諱みて孝の一字を補ふ。

廣要道の章第十五



教民親愛。莫善於孝。教民禮順。莫善於弟。移風易俗。莫善於樂。安上治民。莫善於禮。礼者敬而已矣。

民に親愛を教ふるには、孝より善きはなく、民に禮順を教ふるには、弟より善きはなく、風を移し俗を易ふるには、樂より善きはなく、上を安んじ民を治むるには、禮より善きはなし。禮とは敬のみ。

教民親愛。教謂教化也。下同。民人也。親愛天性之親愛也。莫善於孝。莫善者。極其至而無外之意。下同。孝謂躬行全五備之孝也。教民禮順。民人也。禮者恭敬之理也。順者循理無違之謂也。弟。善事兄長爲弟。謂躬行弟順之德也。移風易俗。君上所化。謂之風。民下所習。謂之俗。吳子曰。移謂遷就其善。易謂變去其惡。移風易俗。猶

民に親愛を教ふとは、教は教化を謂ふ。下同。民は人なり。親愛は天性の親愛なり。孝より善きはなし、善きはなしとは其の至を極めて外なき意なり。下同。孝は躬行して五備の孝を全くするを謂ふ。民に禮順を教ふとは、民は人なり。禮は恭敬の理なり。順は理に循つて違ふことなきを謂ふ。弟とは善く兄長に事ふるを弟と爲す。躬ら弟順の徳を行ふを謂ふ。風を移し俗を易ふとは、君上の化する所、之を風と謂ひ、民下の習ふ所、之を俗と謂ふ。吳子曰く、移すとは其の善に遷り就くを謂ひ、易ふは其の惡を變じ去るを謂ふ

吳子曰く、前出。

言移易風俗。只分其文而已。安上治民。安謂不危。上謂君。治謂不亂。民人也。禮樂。註見于前。此禮樂須就情文本末全備上而講。禮者敬而已矣。敬即因嚴敬之敬也。而已矣者。竭盡而無餘之辭也。禮雖有情文本末之異。其實唯一敬而已矣。如无敬心之眞。則假饒雖三千三百禮儀威儀全備。只是非禮之禮也。故曰。禮者敬而已矣。

と。風を移し俗を易ふとは猶風俗を移易すと言はんがごとし。只其の文を分てるのみ。上を安んじ民を治むとは、安んずるは危くせざるを謂ふ。上は君を謂ふ。治むるは亂さざるを謂ふ。民は人なり。禮樂は註前に見えたり。此の禮樂は須らく情文本末全備の上に就いて講ずべし。禮は敬のみとは、敬は即ち嚴に因つて敬を教ゆる敬なり。のみとは竭盡して餘すなきの辭なり。禮には情文本末の異ありと雖も、其の實は唯一の敬のみ。もし敬心の眞なきときは、則ちたとひ三千三百の禮儀威儀全く備はるといへども、只これ非禮の禮なり。故に禮とは敬のみといへり。

三千三百の禮儀威儀、中庸禮儀三百、威儀三千。

故敬其父。則子悅。敬其兄。則弟悅。敬其君。則臣悅。敬一人。而千萬人悅。所敬者寡。而悅者衆。此之謂要道。

故に其の父を敬ふときは、則ち子悦び、其の兄を敬ふときは、則ち弟悦び、其の君を敬ふときは、則ち臣悦ぶ。一人を敬つて、千萬人悦ぶ。敬ふ所の者寡くして、しかも悦ぶ者衆し。此れ



をこれ要道と謂ふ。

敬其父。其指君而言。下其兄其君  
共同。上老老。而民興孝。故上敬  
其父。所以敬天下之爲人父者也。  
無所不通之敬也。下文所謂教以孝。  
所以敬天下之爲人父者也是也。子  
悅。子指天下之爲人子者而言。悅  
謂愛敬之真心通融明快。而興孝也。  
與學而時習之不亦說乎之說。理義  
之悅我心之悅同。下弟悅臣悅做此。  
敬其兄。兄經曰。雖天子。必有先  
也。言有兄也。是也。上長長。而  
民興弟。故上敬其兄。所以敬天下  
之爲人兄者也。無所不通之敬也。  
下文所謂教以弟。所以敬天下之爲

上老を老とす云々、大  
學の語。

學んで時に之を習ふ、  
論語學而篇。  
理義の我が心を悦ば  
す、孟子告子上篇の  
語。

上長を長とす云々、大  
學の語。

其の父を敬ふとは、其のは君を指して言ふ。下の其の  
兄其の君の其のも同じ。上老を老として民孝に興る。  
故に上其の父を敬ふは天下の人の父たる者を敬ふゆゑ  
んなり。通ぜざる所なき敬なり。下文のいはゆる教ふ  
るに孝を以てするは天下の人の父たる者を敬ふゆゑ  
なりと是なり。子悦ぶとは、子は天下の人の子たる者  
を指して言ふ。悦ぶとは愛敬の真心通融明快にして孝  
に興るを謂ふ。學んで時に之を習ふ、亦説よつはしからずや  
の説ぶ、理義の我が心を悦ばすの悦ぶと同じ。下の弟悦  
ぶ臣悦ぶも此に做へ。其の兄を敬ふとは、兄は經に天子  
といへども必ず先んずるあり、兄あるを言ふといへる  
ものは是なり。上長を長として民弟たいていに興る。故に上其の  
兄を敬ふは天下の人の兄たる者を敬ふゆゑんなり。通  
ぜざる所なきの敬なり。下文にいはゆる教ふるに弟を

人兄者也是也。敬其君。易曰。家  
人有嚴君焉。父母之謂也。大學曰。  
孝者所以事君也。經曰。雖天子。  
必有尊也。言有父也。嚴父配天。  
所以敬其君也。上事家人之嚴君。  
而盡臣道。而敬之。則下興其忠敬。  
故敬其嚴君。所以敬天下之爲人君  
者也。下文所謂教以臣。所以敬天  
下之爲人君者也是也。敬一人。一  
人指父而言。經曰。資於事父以事  
母。而愛同。資於事父以事君。而  
敬同。故母取其愛。而君取其敬。  
兼之者父也。故以孝事君則忠。以  
敬事長則順。夫如此。則曰敬其父。  
曰敬其兄。曰敬其君。畢竟惣統於

以てするは天下の人の兄たる者を敬ふゆゑんなりとは  
なり。其の君を敬ふとは、易に曰く家人嚴君あり。父  
母を謂ふと。大學に曰く孝は君に事ふるゆゑんなりと。  
經に曰く天子といへども必ず尊ぶあり、父あるを言ふ  
と。父を嚴び天に配するは其の君を敬ふゆゑんなり。  
上家人の嚴君に事へて臣道を盡して之を敬ふときは、  
則ち下其の忠敬に興る。故に其の嚴君を敬ふは天下の  
人の君たる者を敬ふゆゑんなり。下文にいはゆる教ふ  
るに臣を以てするは、天下の人の君たる者を敬ふゆゑ  
んなりと是なり。一人を敬ふとは、一人は父を指して  
言ふ。經に曰く父に事ふるに資つて以て母に事へて愛  
同じ。父に事ふるに資つて以て君に事へて敬同じ。故  
に母には其の愛を取りて、君には其の敬を取る。之を  
兼ねたるものは父なり。故に孝を以て君に事へまつる  
ときは、則ち忠なり。敬を以て長に事ふるときは、則

易に曰く、家人の卦の  
象辭。



敬父一人而已矣。故結之以敬一人。而示一本之蘊焉。妙哉。切哉。千萬人悅。千萬人指天下之爲人子弟臣者而言。天下子弟臣。何啻千萬言千萬人者。舉其大數也。悅卽子悅之悅也。所敬者寡。謂敬一人。悅者衆。謂千萬人悅。此之謂要道。此之指上文而言。此句結前生後之語也。

ち順なりと。夫れかくの如くなるときは、則ち其の父を敬ふといひ、其の兄を敬ふといひ、其の君を敬ふといふも、畢竟父一人を敬ふに總統するのみ。故に之を結ぶに一人を敬ふを以てして、一本の蘊を示せり。妙なるかな、切なるかな。千萬人悦ぶとは、千萬人は天下の人の子弟臣たる者を指して言ふ。天下の子弟臣、何ぞたゞに千萬のみならんや。千萬人といふは、其の大數を擧げしなり。悦ぶは即ち子悦ぶの悦ぶなり。敬ふ所の者寡しとは、一人を敬ふを謂ふ。悦ぶ者衆しとは、千萬人悦ぶを謂ふ。此をこれ要道と謂ふとは、此之は上文を指して言ふ。此の句前を結び後を生ずる語なり。

廣至徳の章第十六

君子之教以孝也。非家至而日見之也。教以孝。所以敬天下之爲

君子の教ふるに孝を以てするは、家ごとに至つて日に之を見るに非ざるなり。教ふるに孝を以

人父者也。教以弟。所以敬天下之爲人兄者也。教以臣。所以敬天下之爲人君者也。

てするは、天下の人の父たる者を敬ふゆゑんなり。教ふるに弟を以てするは、天下の人の兄たる者を敬ふゆゑんなり。教ふるに臣を以てするは、天下の人の君たる者を敬ふゆゑんなり。

教以孝。教謂教化也。孝以全体言。下孝弟臣。此孝中之一端而已。非家至而日見之。家指天下之家而言。至謂君子行到其家也。之指民而言。見之謂君子親見其民。而耳提面命也。非家至而日見之。言非君子親徧到天下之人家。而日日見其民。而教之也。此一句以開示教化之眞專在於天載無聲無臭上。而不求于聲色之末也。教以孝弟臣。教以身教言。必可在慎獨上講。不可作聲

教ふるに孝を以てすとは、教は教化を謂ふ。孝は全體を以て言ふ。下の孝弟臣も此の孝中の一のみ。家ごとに至つて日に之を見るに非ずとは、家は天下の家を指して言ふ。至るは君子行きて其の家に到るを謂ふ。之は民を指して言ふ。之を見るとは君子親しく其の民を見て耳提面命するを謂ふ。家ごとに至つて日に之を見るに非ずとは、君子親しく徧く天下の人の家に到りて日々其の民を見て之を教ふるに非ざるを言ふ。此の一句は以て教化の眞は専ら天の載は聲もなく臭もなき上に在り。而して聲色の末に求めざるを開示せり。教ふるに孝弟臣を以てすとは、教は身教を以て言ふ。

耳提面命、詩大雅抑篇に面にて之に命ずるにあらず、我其の耳に提すと。親切に人を教誨するをいふ。



色之教而講。下教弟教臣之教同。孝即五備之孝也。弟本孝中之一端。故事父之敬。所以教弟也。經所謂以敬事長則順。此意也。以事言之。則祭義曰。食三老五更於大學。天子袒而割牲。執醬而饋。執爵而酌。冕而惣干。所以教弟也。是也。臣謂臣道。即忠敬也。忠本孝中之一端。故所以事家人嚴君之敬。所以教臣也。經曰。以孝事君則忠。此意也。以事言之。則疏云。朝覲所以教臣。祭帝稱臣。亦以身率下也。是也。所以敬天下之為人父為人兄為人君者。言君子之身教。由窮无言不顯之神。而天下之人皆化之。

必ず慎獨の上に在つて講すべく、聲色の教となして講す可からず。下の弟を教へ臣を教ふるの教へも同じ。

孝は即ち五備の孝なり。弟はもと孝中の一端なり。故に父に事ふる敬は弟を教ふるゆゑなり。經にいはゆる敬を以て長に事ふるときは則ち順とは此の意なり。

五備の孝、前出。紀孝行章第十三の敬、樂、憂、哀、殿の五。

事を以て之を言へば、則ち祭義に曰く三老五更を大學に食ふ。天子袒して牲を割き、醬を執りて饋る。爵を執つて酌す。冕して干を惣る。弟を教ふるゆゑなりとは是なり。臣は臣道を謂ふ。即ち忠と敬となり。忠はもと孝中の一端なり。故に家人嚴君に事ふるゆゑんの敬は、臣を教ふるゆゑなり。經に孝を以て君に事へまつるときは則ち忠なりといへるは、此の意なり。

三老五更、禮記文王世子及び樂記にも出づ。老人をいふ。爵、酒にて口をすすぐ。醬は漬なり、氣をのべる意。冕して干をとる、天子自ら樂人の列に入りてたてをとり持つて舞ひ以て三老五更をたのしましむ。

事を以て之を言へば、則ち疏に曰く、朝覲は臣を教ふるゆゑなり。帝を祭るに臣を稱するも亦身を以て下を率ふるなりとは是なり。天下の人の父たり人の兄たり人の君たる者を敬ふゆゑなりとは、言ふことろは君子の身教は無言不顯の神を窮むるに由つて、天下の人皆之に化して、各其の父兄と君とを敬はざるなし。

而各無不敬其父兄與君。則是上之人所敬其父兄君者。乃所以敬天下之為人父為人兄為人君者也。所謂愛敬盡於事親。而德教加於百姓。刑于四海。無所不通。一貫之神道也。

則ちこれ上の人其の父兄と君とを敬ふ所の者、乃ち天下の人の父たり人の兄たり人の君たる者を敬ふゆゑなり。いはゆる愛敬親に事ふるに盡して、德教百姓に加はり、四海に刑られ、通ぜざる所なし、一貫の神道なり。

無言不顯、不顯とは詩大雅文王篇に有周顯れざらんや。鄭玄の註に周の徳光明ならざらんや、光明なるをいふと。無言にしてしかも大にあらはるゝ神祕のところ。

詩云。愷悌君子。民之父母。非至德。其孰能順民。如此其大者乎。

詩に云く、愷悌の君子は民の父母なりと。至徳に非ずんば、それ孰か能く民を順にすること、此の如くそれ大なるものならんや。

詩大雅洞酌篇。愷悌君子。愷樂也。謂天理之眞樂也。悌易也。謂易簡之易也。樂易者。君子之至德。上文所說是也。故以愷悌二字贊君子

詩は大雅洞酌の篇なり。愷悌の君子とは、愷は樂なり。天理の眞樂を謂ふ。悌は易なり。易簡の易を謂ふ。樂易は君子の至徳なり。上文の説く所これなり。故に愷悌の二字を以て君子を贊するなり。民の父母な



也。民之父母。舉民以包天下之人也。父母之於子。一體分形。身體髮膚。血脉貫通。無所間隔者也。君子體悌之德。於天下之人。心々融和一貫。而無所間隔。有切於父子一体之貫通者。故曰民之父母。非至德其孰能順民如此其大者乎。其語辭也。孰何也。順順天下之順也。指上文子弟臣之悅而言。民人也。指天下之人而言。如此指上文教化而言。大謂其德化彌六合而無外也。此一句反言以明至德要道之廣大高明無所不通。而爲結前生后之語也。

りとは、民を舉げて以て天下の人を包ねたり。父母の子に於けるは、一體にして形を分てるのみ。身體髮膚、血脉貫通して、間隔する所なきものなり。君子體悌の徳、天下の人に於て心々融和一貫して間隔する所なきこと父子一體の貫通よりも切なるものあり。故に民の父母なりといへり。至徳に非ずんば、それ孰れかよく民を順にすること、此の如くそれ大なるものならんやとは、其れとは語の辭なり。孰は何なり。順は天下を順にするの順なり。上文子弟臣の悦ぶを指して言ふ。民は人なり。天下の人を指して言ふ。此の如しとは、上文の教化を指して言ふ。大なりとは其の徳化六合に彌りて外なきを謂ふ。此の一句反言して以て至徳要道の廣大高明にして通ぜざる所なきを明かにして前を結び後を生ずる語となせり。

昔者明王事父孝。故事天明。事母孝。故事地察。長幼順。故上下治。天地明察。神明彰矣。故雖天子。必有尊也。言有父也。必有先也。言有兄也。宗廟致敬。不忘親也。脩身謹行。恐辱先也。宗廟致敬。鬼神著矣。孝弟之至。通於神明。光於四海。無所不通。詩云。自西自東自南自北。無思不服。

むかし明王父に事へて孝なり。故に天に事へまつりて明かなり。母に事へて孝なり。故に地に事へまつりて察かなり。長幼順なり。故に上下治まる。天地に明察なれば、神明彰はる。故に天子といへども、必ず尊ぶことあり。父あるを言ふなり。必ず先んずることあり。兄あるを言ふなり。宗廟に敬に致るは親みを忘れざるなり。身を脩め行を謹むは先を辱めんことを恐るゝなり。宗廟に敬に致れば鬼神著はる。孝弟の至は神明に通じ、四海に光かなり。通ぜざる所なし。詩に云く西より東より南より北より思つて服せざるはなしと。

昔者明王。解見于前。事父孝。故事天明。事母孝。故事地察。明察

むかし明王、解は前に見えたり。父に事へて孝なり、故に天に事へまつりて明かなり、母に事へて孝なり、



謂與天地合其德也。明者光明四通。無所不照之意。察著也。照著不容掩之意。明察本一貫。只因天地分屬有異耳。子曰。仁人之事親也。如事天。事天如事親。由是觀之。則聖人之一言一動。皆事父母之孝。而事天地之明察也。故以明至德而與父母相通融而無所間隔言之謂孝。以與天地合其德。與日月合其明。而與天地明察之妙用相通融而無所間隔言之謂明察。而明察與孝。本一貫而無二致。故曰。事父孝。故事天明。事母孝。故事地察。長幼順。故上下治。長幼謂天子所長所幼也。長其長而幼其幼。能和睦。

故に地に事へまつりて、察しつとかなりとは、明察は天地と其の徳を合するを謂ふ。明は光明四通して照さるる所なき意。察は著ちやくなり、照著掩ふべからざる意。明と察と本一貫す。只天地に因つて分屬異なることあるのみ。子曰く仁人の親に事ふるや天に事へまつるが如く、天に事へまつること親に事ふるが如しと。是に由つて之を觀れば、則ち聖人の一言一動皆父母に事ふる孝にして、天地に事へまつる明察なり。故に至徳を明かにして父母と相通融して間隔する所なきを以て之を言つて、天地明察の妙用と相通融して間隔する所なきを以て之を言つて明察と謂ふ。而して明察と孝とも一貫して二致なし。故に父に事へて孝なり。故に天に事へまつりて明かなり。母に事へて孝なり。故に地に事へまつりて察かなりといへり。長幼順なり、故に上下治

子曰く云々、禮記哀公問の語。

無所乖戾。此之謂長幼順。上下泛指天下尊卑長幼而言。治謂安其分而不亂也。天地明察。神明彰。自一言一動以至于郊社之祭。誠敬與天地通。明察與日月合。而無一毫昏蔽。此之謂天地明察。神明謂天神地示也。彰照著分明可見之意也。言神明之妙用。因聖人之德業。而照著分明可見也。雖天子。必有尊必有先。必字有力。尊敬也。先亦恭敬之意。比尊稍緩。此二句明所以長幼順也。言有父有兄。注疏云。父謂諸父。兄謂諸兄。虞氏曰。雖天子。必有當尊而敬之者。名曰父。必有當先而敬之者。名曰兄。二說

るとは、長幼は天子の長としたまふ所幼としたまふ所を謂ふ。其の長を長として其の幼を幼とし、能く和睦して乖戾する所なし。此を長幼順なりと謂ふ。上下は泛く天下の尊卑長幼を指して言ふ。治まるとは其の分に安んじて亂らざるを謂ふ。天地に明察なれば神明彰はるとは、一言一動より以て郊社の祭に至るまで誠敬天地と通じ、明察日月と合して一毫の昏蔽なし。此を天地に明察なりと謂ふ。神明は天神地示を謂ふ。彰はるとは照著分明見るべき意なり。神明の妙用聖人の徳業によりて照著分明見るべきを言へり。天子と雖も、必ず尊ぶあり、必ず先んずるありとは、必ずの字力あり。尊ぶは敬ふなり。先んずるも亦恭敬の意。尊に比して稍緩し。此の二句は長幼順なるゆゑんを明す。父あり兄あるを言ふとは、注疏に云く父は諸父を謂ひ、兄は諸兄を謂ふと。虞氏曰く天子と雖も、必ず當に尊

尊に比す、諸本皆此尊に作る。戸田氏本に従ふ。

虞氏曰く、前出。



可相兼看。宗廟致敬。謂祭致其嚴也。舉追遠之誠敬。以示大孝終身之精蘊也。不忘親。親親愛。所謂親生之膝下之親也。不忘謂常存而不失也。脩身謹行。脩理也。脩身謂一身之作用循天理而不亂也。所謂非禮勿視。非禮勿聽。非禮而言。非禮勿動是也。謹慎也。重也。行謂接物應事之行。謹行謂慎重於接應之行。而不輕。發必中其道也。脩身謹行原一事。而分言而已。與首章所謂立身行道同。恐辱先。恐懼也。所謂戰々兢々。如臨深淵。如履薄氷是也。先謂父母先祖也。身體髮膚。受之先。故人不脩身謹

んで之を敬ふべき者あり、名づけて父といひ、必ず當に先んじて之を敬ふべき者あり、名づけて兄といふと。二説相兼ねて看るべし。宗廟に敬に致るとは、祭に其の嚴に致るを謂ふ。遠を追ふ誠敬を舉げて以て大孝終身の精蘊を示せり。親みを忘れずとは、親は親愛なり。いはゆる親み之を膝下に生ずる親みなり。忘れずとは常に存して失はざるを謂ふ。身を脩め行を謹むとは、脩は理なり。身を脩むるは一身の作用天理に循つて亂れざるを謂ふ。いはゆる禮に非ざれば視る勿れ、禮に非ざれば聞く勿れ、禮に非ざれば言ふ勿れ、禮に非ざれば動く勿れとは是なり。謹は慎なり、重なり。行は物に接し事に應ずる行を謂ふ。行を謹むは接應の行を慎重にして、輕くせず、發して必ず其の道に中るを謂ふ。身を脩むると行を謹むとはもと一事にして分ち言ふのみ。首章にいはゆる身を立て道を行ふと同じ。

遠きを追ふ、論語學而篇曾子曰く終を慎み遠きを追へば民の徳厚きに歸す。

禮に非ざれば視る勿れ云々、論語顏淵篇の語。

行。而辱其身。所以辱其父母先祖之身也。恐辱先以示不敢毀傷之敬也。宗廟致敬。上言承祭祀之心術。此又言其效。故舉此一句。鬼神著。鬼神父母先祖之鬼神也。著明也。謂鬼神來格。享祭祀誠敬之孝。而合莫照著。而不可掩也。所謂微之顯。如在其上。如在其左右是也。孝弟之至。弟亦孝中之一件而已。上文孝弟相兼論。故又孝弟兼舉。專可重孝上看。至者極其至。而無加之意也。孝弟之至謂嚴父配天也。通於神明。通謂合同而無所間隔也。神明舉天地神明。而兼宗廟鬼神於其中矣。通於神明。即上文神明彰

先を辱めんことを恐るとは、恐るは懼るなり。いはゆる戰々兢々、深淵に臨むが如く薄氷を履むが如くする是なり。先は父母先祖を謂ふ。身體髮膚之を先に受く。故に人身を脩め行を謹ますして其の身を辱むるは其の父母先祖の身を辱むるゆゑなり。先を辱むるを恐るゝは以て敢て毀ひ傷らざる敬を示す。宗廟に敬に致るとは、上には祭祀に承る心術を言ひ、此には又其の效を言ふ。故に此の一句を舉ぐ。鬼神著はるとは、鬼神は父母先祖の鬼神なり。著は明なり。鬼神來格し祭祀誠敬の孝を享けて合莫照著にして掩ふべからざるを謂ふ。いはゆる微の顯はるゝ其の上に在るが如く其の左右に在るが如しとは是なり。孝弟の至とは、弟も亦孝中の一の件のみ。上文孝弟相兼ねて論ず。故に又孝弟兼ね舉ぐ。專ら孝の上を重んじて看るべし。至とは其の至を極めて加ふるなきの意なり。孝弟の至とは

合莫、禮記禮運篇の語。生人の心が先祖の鬼神と冥漠の中に契合する意。微の顯、其の上に在るが如く云々、中庸第十六章の語。



矣。鬼神著矣是也。光於四海。光者明之用也。謂照臨所及也。四海極其大而言。六合有形之處。盡在其中矣。無所不通。此一句說孝之全体。言不啻光于四海有形之中。雖天地有形之外。太虛寥廓之至大。無所不通也。詩大雅文王有聲篇。自西自東自南自北。此二句舉四方以包六合之大。以形容無所不至之義也。無思不服。思謂心之感通擬議也。嚴父配天之孝思是也。服從也。謂無所違逆也。無思不服。言嚴父配天之孝思。活潑流通。無處無時所違逆。故其孝思之所及。亦尊信而無所違逆也。

父を嚴び天に配するを謂ふ。神明に通ずとは、通ずるは合同して間隔する所なきを謂ふ。神明は天地の神明を擧げて宗廟の鬼神を其の中に兼ぬ。神明に通ずるは即ち上文の神明彰はれ鬼神著はるゝ是なり。四海に光かなりとは、光は明の用なり。照臨の及ぶ所を謂ふ。四海は其の大を極めて言ふ。六合有形の處盡く其の中に在り。通ぜざる所なしとは、此の一句は孝の全體を説く。言ふこゝろはたゞに四海有形の中に光かなるのみならず、天地有形の外、太虚寥廓の至大と雖も、通ぜざる所なきなり。詩は大雅文王有聲の篇なり。西より東より南より北より。此の二句は四方を擧げて以て六合の大を包ね、以て至らざる所なき義を形容す。思つて服せざるはなしとは、思ふは心之感通擬議を謂ふ。父を嚴び天に配する孝思これなり。服すは従ふなり。違逆する所なきを謂ふ。思つて服せざるはなしと

は、父を嚴び天に配する孝思活潑流通して處となく時として違逆する所なし。故に其の孝思の及ぶ所も亦尊信して違逆する所なきを言ふ。

廣揚名の章第十八

君子之事親孝。故忠可移於君。事兄弟。故順可移於長。居家理。故治可移於官。是以行成於內。而名立於後世矣。

君子の親に事へて孝なり。故に忠をば君に移すべし。兄に事へて弟なり。故に順をば長に移すべし。家に居て理む。故に治をば官に移すべし。こゝを以て行内に成つて、而して名後世に立つ。

此段承上文示上下通用之孝行。故以君子更端。事親孝。故忠可移於君。移易也。謂變通也。下同。故承上起下辭。自此至可移于官。以事類明變通之機。故下一故字以立內外遠近之辨也。事親孝。故忠可

此の段は上文を承けて上下通用の孝行を示す。故に君子を以て端を更む。親に事へて孝なり、故に忠をば君に移すべしとは、移すは易ふるなり。變通するを謂ふ。下同。故にとは上を承けて下を起す辭。此より官に移すべしに至るまで、事類を以て變通の機を明す。故に一の故の字を下して以て内外遠近の辨を立つ。親



移于君。言君子至德。無所不通。是故近而在家。則盡五備之孝。遠而在國。則將順其美。匡救其惡之忠。可變通于事君也。事兄弟。故順可移於長。順亦悌也。悌順本孝中之一德也。事兄弟。故順可移於長。言有至德者。近而在家。則事兄能盡弟恭。遠而在國。則至德之順。可變通于事長也。居家理。故治可移於官。理謂物得其理而不亂也。治亦理也。官謂官政也。居家理謂齊家人。而各得其理。而不紊也。治謂官政得其理。而不亂也。曰理。曰治。皆孝中之一德也。居家理。故治可移於官。言有至德者。

に事へて孝なり、故に忠をば君に移すべしとは、君子の至徳通ぜざる所なし。このゆゑに近くして家に在るときは、則ち五備の孝を盡し、遠くして國に在るときは、則ち其の美を將順し其の惡を匡救する忠を君に事へまつるに變通すべきを言ふ。兄に事へて弟なり、故に順をば長に移すべしとは、順も亦悌なり。悌と順とはもと孝中の一徳なり。兄に事へて弟なり、故に順をば長に移すべしとは、至徳ある者近くして家に在るときは、則ち兄に事へて能く弟恭を盡し、遠くして國に在るときは、則ち至徳の順、長に事ふるに變通すべきを言ふ。家に居て理む、故に治をば官に移すべしとは、理むとは物其の理を得て亂れざるを謂ふ。治も亦理なり。官は官政を謂ふ。家に居て理むとは家人を齊へて各其の理を得て紊れざるを謂ふ。治とは官政其の理を得て亂れざるを謂ふ。理といひ治といふも皆孝中の一

近而齊家。則家人皆理。遠而服官政。則治可變通于官也。是以。指上文孝徳無所不通也。行成於内。行謂率至徳而行也。所謂天之經也。地之義也。人之行也是也。成畢也。善也。畢其事。而無欠闕之意也。虞氏曰。内敬心之内也。名立於後世。後世謂時之無窮盡也。此一句以示無時不通也。

徳なり。家に居て理む、故に治をば官に移すべしとは、至徳ある者近くして家を齊ふるときは、則ち家人皆理り、遠くして官政に服するときは、則ち治をば官に變通すべきを言ふ。こゝを以てとは上文の孝徳通ぜざる所なきを指す。行内に成るとは、行は至徳に率つて行ふを謂ふ。いはゆる天の經なり、地の義なり、人の行なりとは是なり。成るは畢るなり、善くするなり。其の事を畢へて欠闕なき意なり。虞氏曰く内は敬心の内なりと。名後世に立つとは、後世は時の窮盡なきを謂ふ。此の一句は以て時として通ぜざることなきを示す。

虞氏曰く、前出。

閨門の章第十九

閨門之内。具禮已乎。嚴父嚴兄。妻子臣妾。猶百姓徒役也。

閨門小門也。閨門之内。猶言小家

閨門の内、禮を具へたる已乎。父を嚴び兄を嚴ぶ。妻子臣妾は猶百姓徒役のごとし。

閨門は小門なり。閨門の内とは猶小家の中と言はんが



之中也。具禮已乎。具者該貯而無所不足之意也。禮者理也。謂治天下之禮也。已乎語辭也。嚴父嚴兄。嚴父孝也。孝者所以事君也。嚴兄弟也。弟者所以事長也。妻子臣妾。猶百姓徒役。百姓謂百官也。按周禮六官之屬。各有徒。註云。民給徭役者。疏曰。徒食五人。祿其官亞士。故號庶人在官者也。役使也。徒役謂庶人之役使於官者也。周禮宮伯作其徒役之事之類是也。家有妻子。猶國之有百官。家之有臣妾。猶國之有徒役也。徒役舉屬官最下者。以包其餘。帥妻之義。養子之慈。御臣妾之寬。所以治百姓

ごとし。禮を具へたるかなとは、具ふるは該ね貯へて足らざる所なき意なり。禮は理なり。天下を治むる禮を謂ふ。已乎は語の辭なり。父を嚴び兄を嚴ぶとは、父を嚴ぶは孝なり。孝は君に事へまつるゆゑなり。兄弟を嚴ぶは弟なり。弟は長に事ふるゆゑなり。妻子臣妾は猶百姓徒役のごとしは、百姓は百官を謂ふ。按ずるに周禮六官の屬各徒あり。註に曰く、民の徭役に給する者と。疏に曰く、徒は五人を食ふ。其の官に祿すること士に亞ぐ。故に庶人官に在る者を號すと。役は使なり。徒役は庶人の官に役使せらるる者を謂ふ。周禮に宮伯其の徒役の事を作すといふの類これなり。家の妻子あるは猶國の百官あるがごとく、家の臣妾あるは猶國の徒役あるがごとし。徒役は屬官の最下の者を擧げて以て其餘を包ぬ。妻を帥うるの義、子を養ふの慈、臣妾を御するの寬は、百姓徒役を治むる

法に曰く、天官冢宰、胥十有二人、徒百有二十人の下の鄭玄の註なり。疏に曰く、疏の文には胥は六人を食ふに連記する爲、士に亞ぐの上に「並に」の字あり。今單に徒のみを引く。故に先生わざと「並」の字を省かす。宮伯其の徒役の事を作す、天官小宰職の文。

徒役也。

ゆゑなり。

諫争の章第二十

曾子曰。若夫慈愛恭敬。安親揚名。參聞命矣。敢問。從父之令。可謂孝乎。

曾子曰く、夫の慈愛恭敬に若つて親を安んじ名を揚ぐるは、參命を聞きたり。敢て問ふ、父の令に従ふは孝と謂ふべきかと。

若夫、假名書き孝經にはかの……ごときはと訓ぜらる。今は啓蒙の正文若は順也の解に従ふ。

若順也。夫有所指之辭。此指至德而言。慈愛恭敬。疏云。愛出於内。慈爲愛體。敬生于心。恭爲敬貌。江氏曰。此語甚粹。安親謂安樂親心也。五備之孝行。皆所以安親也。經所謂生則親安之。祭則鬼享之是也。揚名。名明王聖人君子孝子的顯名也。名者實之賓。名之於實。猶影響之於音形。故務實立本之外。非別有揚名之工夫也。參曾子名。

若ふは順ふなり。夫のとは指す所ある辭、此は至德を指して言ふ。慈愛恭敬とは、疏に云く愛は内に出て、慈は愛の體たり。敬は心に生じ、恭は敬の貌たりと。江氏曰く此の語甚だ粹しと。親を安んずとは親の心を安樂にするを謂ふ。五備の孝行は皆親を安んずるゆゑなり。經にいはゆる生けるには則ち親之を安んじ、祭るときは則ち鬼之を享くと是なり。名を揚ぐとは、名は明王聖人君子孝子的の顯名なり。名は實の賓なり。名の實に於けるは猶影響の音形に於けるがごとし。故に實を務め本を立つる外、別に名を揚ぐる工夫ある

若は順なり、爾雅釋言の文、尙書堯典の曰若稽古の孔傳にも引用す。江氏曰く、此の句孝經大全中の江氏に見出し得ず。

別、もと非の上にあり。今謹んで訂す。



聞命。聞謂嘿識心通。如朝聞道之  
聞。命教也。敢問。疑思問。學之  
則也。所以敢問也。從父之令。令  
命也。舉受命之事。以例其餘言行。  
從父之令。謂一從順父令。而雖不  
義。不敢諫止也。可謂孝乎。乎疑  
辭也。曾子已知陷父于不義之不孝。  
而又諫爭。則却有傷愛敬之和。而  
又以順從本孝子之素志。故不曰非  
不孝乎。而曰可謂孝乎。而疑問之  
也。

子曰。是何言與。是何言與。言  
之不通也。昔者天子有爭臣七人。  
雖無道。不失其天下。諸侯有爭

に非ず。參は曾子の名なり。命を聞くとは、聞は嘿識  
心通するを謂ふ。朝に道を聞の聞くの如し。命は教な  
り。敢て問ふとは、疑に問ふことを思ふは學の則な  
り。敢て問ふゆゑなり。父の令に従ふ。令は命な  
り。命を受くる事を舉げて以て其餘の言行を例す。  
父の令に従ふとは、一ら父の令に従順して、不義といへ  
ども敢て諫止せざるを謂ふ。孝と謂ふ可しやとは、乎  
は疑の辭なり。曾子已に父を不義に陥るゝの不孝を知  
る。而も又諫争するときは、則ち却つて愛敬の和を傷  
くるあり。而して又順従はもと孝子の素志なるを以て  
の故に、不孝に非ずやといはずして、孝と謂ふ可しや  
といつて、之を疑ひ問へるなり。

朝に道を聞けば夕に死  
すとも可なり、論語  
里仁篇の語。  
疑に問ふことを思ふ、  
論語季氏篇、君子に  
九思ありの一。

子曰く、これ何の言ぞや。これ何の言ぞや。言  
の通せざるなり。むかし天子に争ふ臣七人あれ  
ば、無道なりと雖も、其の天下を失はず。諸侯

臣五人。雖無道。不失其國。大  
夫有争臣三人。雖無道。不失其  
家。士有争友。則身不離於令名。  
父有争子。則身不陷於不義。故  
當不義。則子不可以不爭於父。  
臣不可以不爭於君。故當不義。  
則争之。從父之令。又焉得爲孝  
乎。

に争ふ臣五人あれば、無道なりと雖も、其の國  
を失はず。大夫に争ふ臣三人あれば、無道なり  
と雖も、其の家を失はず。士に争ふ友あるとき  
は、則ち身令名を離れず。父に争ふ子あるとき  
は、則ち身不義に陥らず。故に不義に當るとき  
は、則ち子は以て父に争はずんばあるべから  
ず。臣は以て君に争はずんばあるべからず。故  
に不義に當るときは、則ち之を争ふ。父の令に  
従ふのみなるは、又焉を孝となすを得んやと。

與疑辭。下同。何言猶言以何心而  
爲如此言與。蓋言者心之聲也。故  
在於心。而發于言。因言而知其心。  
夫子嘗知曾子之心。是以將謂不爲  
如此言。而今曾子有此問。故謂以

與は疑の辭なり。下同。何の言ぞやとは猶何心を以  
て此の如き言を爲すかと言はんがごとし。蓋し言は心  
の聲なり。故に心に在つて言に發し、言に因つて其の  
心を知る。夫子嘗て曾子の心を知る。是を以てはた此  
の如き言を爲さずと謂へり。而るに今曾子此の問あ

言は心の聲なり、楊子  
法言問神篇に言は心  
の聲なり、書は心の  
畫なり。



何心而爲此言與。而疑難戒之。何言與。何言與。重言者。所以深警戒之也。言之不通也。言指曾子所問之言。不通謂固滯而不通達也。昔者。疏云。夫子述孝經之時。當周亂衰之代。無此諫爭之臣。故曰昔者也。天子。不言先王。而言天子者。諸稱先王。皆指聖王。此言無道。所以不稱先王也。爭臣七人。爭謂諫止其非若爭然。爭臣謂有賢德。而可匡救其過惡臣。非必極諫犯爭。而后爲爭臣。又非有舊說所謂司諫爭一件官也。七人非謂人數之定限。但姑約言之爾。所謂舜有臣五人。而天下治之類也。舜臣豈

り。故に何の心を以て此の言を爲すかと謂つて疑難して之を戒む。何の言ぞや何の言ぞや、重ねて言ふものは深く之を警戒するゆゑなり。言の通ぜざるやとは、言は曾子問ふ所の言を指す。通ぜずとは固滯にして通達せざるを謂ふ。昔者とは、疏に云く夫子孝經を述ぶる時は周の亂衰の代に當り、此の諫争の臣なし。故にむかしといへり。天子とは、先王と言はずして、天子と言ふは、諸先王と稱するは皆聖王を指す。此には無道と言ふ。先王と稱せざるゆゑなりと。争ふ臣七人とは、争ふは其の非を諫め止め争ふが若く然るを謂ふ。争ふ臣は賢徳ありて其の過惡を匡救すべき臣を謂ふ。必ずしも極諫し犯し争つて而して後に争ふ臣と爲すに非ず。又舊説のいはゆる諫争一件を司る官あるに非ず。七人は人數の定限を謂ふに非ず。たゞ姑く之を約言するのみ。いはゆる舜に臣五人ありて天下治るの

天子の二字は先生が疏を引用する時、之を挿入せられたるもの。

舊説、孝經孔傳の七人とは三公及び前疑後承左輔右弼を謂ふ。凡そ此の七官は天子の非を諫止するを主るといふもの。これなり。疏中には此の外舜に臣五人あり云々、論語泰伯篇の語。

止五人。姑約言之也。舉七數者。七陽數也。陽剛明而能變化。諫争以剛明變化爲主。故舉陽數也。九亦陽數。而不舉者。九數之極。而陽變成陰之數也。才難。故不舉數極。且諫争主剛明。故不取變陰晦之數也。下五人三人亦陽數也。降殺以兩者。礼制之常也。不可必泥其數也。無道。此無道。須輕看。非謂如桀紂暴惡。只謂心無道義之守也。所謂上無道揆是也。不失天下國家。舉諫諍之功效。以示不可不爭也。士有争友。争友謂益友也。士不能有争臣。必藉益友之忠告。而改過惡遷善。故曰有争友。不離

類なり。舜の臣豈たゞ五人のみならんや。姑く之を約言するのみ。七數を擧ぐる者は七は陽數なればなり。陽は剛明にして能く變化す。諫争は剛明變化を以て主と爲す。故に陽數を擧ぐ。九も亦陽數なり。而も擧げざる者は九は數の極なり。而して陽變じて陰と成るの數なり。才難し。故に數の極を擧げず。且つ諫争は剛明を主とす。故に陰晦に變ずる數を取らず。下の五人三人も亦陽數なり。降殺するに兩を以てする者は禮制の常なり。必ずしも其の數に泥む可からず。無道とは、此の無道は須らく軽く看るべし。桀紂の暴惡の如きを謂ふに非ず。只心に道義の守なきを謂ふ。いはゆる上に道揆なきなりと是なり。天下國家を失はずとは、諫諍の功效を擧げ以て争はずんばあるべからざるを示す。士に争ふ友ありとは、争ふ友は益友を謂ふ。士には争臣あること能はず。必ず益友の忠告に藉りて過惡を改

才難し、人才の得難きをいふ、論語泰伯篇、前記舜に臣五人ありの下に孔子の語として見ゆ。降殺するに兩を以てす、降しそぐに七、五、三と段々二づつ減ずるをいふ。

上に道揆なし、孟子離婁上篇、上に道揆なきなり下に法守なきなり云々。



於令名。令善也。不離於令名。舉效以見其進脩之成功。父有爭子。爭子謂盛德子也。此一句包天子諸侯大夫士庶而言。此段主意。在此一句上。身不陷於不義。身指親身而言。不義謂不合人義也。人之行不義。猶獸納于陷阱。故曰陷於不義。身不陷於不義。謂正心脩身。當不義。謂君父行不義時也。子不可以不爭於父。臣不可以不爭於君。經曰。夫孝始于事親。中于事君。且天子諸侯大夫士庶之子。均爲子也。均愛父也。父若有過。子必幾諫。不可諉之於爭臣爭友。故先父子。而后君臣。其旨深矣。此二句

め善に遷る。故に争ふ友ありといふ。令名を離れずとは、令は善なり。令名を離れざるは效を擧げて以て其の進脩の成功を見はす。父に争ふ子ありとは、争ふ子は盛徳の子を謂ふ。此の一句は天子諸侯大夫士庶を包ねて言ふ。此の段の主意此の一句の上にある。身不義に陥らざとは、身は親の身を指して言ふ。不義は人の義に合はざるを謂ふ。人の不義を行ふは猶獸の陷阱に納るがごとし。故に不義に陥るといふ。身不義に陥らずとは、心を正し身を脩むるを謂ふ。不義に當るとは、君父不義を行ふ時を謂ふ。子以て父に争はずんばあるべからず、臣以て君に争はずんばあるべからず、經に曰く夫れ孝は親に事ふるに始まり、君に事へまつるに中すと。且つ天子諸侯大夫士庶の子も均しく子たりに均しく父を愛す。父若し過あらば子必ず幾く諫む。之を争臣争友に諉すべからず。故に父子を先にし

不離於令名、上下岡田氏本及び書院寫本に従ふ。

幾く諫む、論語里仁爲美、父母に事へては幾く諫む。氣を下し色をよるこばしくし。等を柔けて段々に諫む。

結上文說不可不爭之理。以起下文。故當不義。則爭之。故字承上二句以起下句。之指不義言。此一句說孝子之所以受用也。從父之令。焉得爲孝乎。焉得爲孝乎。反言以甚戒其爲不孝也。此二句惣結上文。以與發端何言與。言之不通相照應。

て君臣を後にす。其の旨深いか。此の二句上文を結び、争はずんばあるべからざる理を説き、以て下文を起せり。故に不義に當るときは則ち之を争ふとは、故にの字は上の二句を承けて以て下の句を起す。之は不義を指して言ふ。此の一句は孝子の受用するゆゑんを説く。父の令に従ふのみなるは焉ぞ孝となすを得んや。焉ぞ孝と爲すを得んやとは、反言して以て甚だ其の不孝たるを戒む。此の二句は上文を總べ結んで、以て發端の何の言ぞや、言の通ぜざるやと相照應す。

事君の章第二十一

君子之事上也。進思盡忠。退思補過。將順其美。匡救其惡。故上下能相親也。

君子の上<sup>上</sup>に事へまつるや、進んでは忠を盡さんことを思ひ、退いては過を補はんことを思ふ。其の美を將順し、其の惡を匡救す。故に上下能く相親む。

此君子亦指聖賢而言。上謂君也。

此の君子も亦聖賢を指して言ふ。上とは君を謂ふ。上



因上文論爭臣。而將說事君之忠。故用此一句承上起下。進思盡忠。進謂自私家而適公所。進見于君也。思謂心在茲而精一也。下同。盡謂至其極。而無遺也。中心爲忠。移嚴父配天之心。以事君之德是也。此一句此段綱領。下三句此一句之條目也。退思補過。退謂不進見于君之時。對進而曰退而已。補裨也。填也。裨填其欠闕之意也。無心而違道爲過。補過。詩所謂袞職有闕。維仲山甫補之是也。將順其美。將勸也。助也。成也。順從也。和也。吳子曰。將謂助之於後。順謂導之於前。其指君而言。美謂善心善行

文に争臣を論ずるに因つて、將に君に事ふる忠を説かんとす。故に此の一句を用ひて上を承け下を起す。進んでは忠を盡さんことを思ふとは、進むは私家より公所に適き君に進見するを謂ふ。思ふとは心茲に在りて精一なるを謂ふ。下同。盡すとは其の極に至りて遺すなきを謂ふ。中心を忠となす。父を嚴び天に配する心に移して以て君に事ふる徳これなり。此の一句は此の段の綱領なり。下の三句は此の一句の條目なり。退いては過を補はんことを思ふとは、退くは君に進見せざる時を謂ふ。進むに對して退くといふのみ。補は裨なり、填なり。其の欠闕を裨填する意なり。心なくして道に違ふを過となす。過を補ふとは、詩にいはゆる袞職闕くるあれば維仲山甫之を補ふと是なり。其の美を將順すとは、將は勸なり、助なり、成なり。順は從なり、和なり。吳子曰く將は之を後に助くるを謂ひ、

詩にいはゆる、大雅蒸民篇。袞職は天子の御職掌をいふ。吳子曰く云々、諸本引用を誤る。今は篠原氏本及び吳本に従ふ。

也。匡救其惡。匡正也。救止也。吳子曰。匡謂正之於微。救謂止之於顯。其指君而言。惡謂惡心暴行也。故上下能相親。故承上文忠誠言。上謂君也。下謂臣也。能字有力。假令雖相親。不由道義。則不可謂能也。相親謂下以忠事君。上以禮接臣。能相親交泰。而同心同德也。

詩云。心乎愛矣。遐不謂矣。中心藏之。何日忘之。

詩小雅隰桑篇。心乎愛矣。心謂心所存主也。愛至德之愛敬也。心乎愛矣。言心融于至德之愛。而無一

順は之を前に導くを謂ふと。其のとは君を指して言ふ。美は善心善行を謂ふ。其の惡を匡救すとは、匡は正なり。救は止なり。吳子曰く匡は之を微に正すを謂ひ、救は之を顯に止むるを謂ふと。其のとは君を指して言ふ。惡は惡心暴行を謂ふ。故に上下能く相親むとは、故には上文の忠誠を承けて言ふ。上は君を謂ひ、下は臣を謂ふ。能の字力あり。たとひ相親むと雖も、道義に由らざるときは、則ち能くと謂ふべからず。相親むとは下忠を以て君に事へ、上禮を以て臣に接し能く相親み交泰して心を同じくし徳を同じくするを謂ふなり。

詩に云く、愛を心にすれば、遐しと謂はず。中心に之を藏す。何れの日にか之を忘れんやと。

詩は小雅隰桑の篇。愛を心にすればとは、心は心の存主する所を謂ふ。愛は至徳の愛敬なり。愛を心にすとは、心至徳の愛に融けて一毫の閑雜なきを言ふ。遐し

愛を心にす、下句を遐しといはずと倒裝的に讀めば、上句も心に愛すればと讀むも可なり。先生は意あつてかく讀まれしなり。



毫之間雜也。遐不謂矣。朱子曰。遐遠也。遐不謂。猶言不謂遐也。遐不謂矣。謂遠邇上下。無所不通也。中心藏之。中心謂事君之忠心也。藏守於密之意也。之指上文遐不謂之愛而言。下忘之之同。何日忘之。言無可忘之日也。

と謂はずとは、朱子曰く遐は遠なりと。遐しといはざるは猶遐しと謂はずと言はんがごとし。遐しと謂はずとは遠邇上下通ぜざる所なきを謂ふ。中心に之を藏すとは、中心は君に事へまつる忠心を謂ふ。藏すとは密に守る意なり。之は上文の遐しといはざるの愛を指して言ふ。下の之を忘れんやの之も同じ。何れの日か之を忘れんやとは、忘る可き日なきを言ふ。

朱子曰く、此の句のみは朱文公定古文孝經の朱申の注をさす。篠原氏が朱鴻をさすとせざるは蓋し誤なり。

孝子之喪親也。哭不偯。禮無容。言不文。服美不安。聞樂不樂。食旨不甘。此哀戚之情也。

孝子喪親。此孝子亦指聖賢而言。下說居喪之孝。故以孝子更端也。持服曰喪。親父母也。父母死而居

孝子の親に喪するや、哭して偯せず。禮に容することなし。言文らず。美を服して安からず。樂を聞けども樂まず。旨を食へども甘からず。これ哀戚の情なり。

孝子親に喪すとは、此の孝子も亦聖賢を指して言ふ。下に喪に居る孝を説く。故に孝子を以て端を更む。服を持するを喪すといふ。親は父母なり。父母死して其

其喪謂喪親。因上文何日忘之。而將說事死之道。故舉此一句。以承上起下。哭不偯。哭哀聲也。吳子曰。偯哭聲從容。而有餘也。禮記問傳云。大功之喪。三曲而偯。此父母之喪。哀痛之極。故其哭也。氣竭而息。无復餘聲。禮無容。禮謂居喪所行之禮法也。無容。謂舉措進退无脩飾爲容儀也。言不文。言言語也。不文。謂有事不得已。則直致其言。不治擇文飾成文辭也。服美不安。美謂美飾之衣服錦繡之類。不安。謂哀戚不安。而不忍服美衣也。聞樂不樂。言平時聞樂。則必樂。今因哀戚太甚。聞樂却哀

の喪に居るを親に喪すと謂ふ。上文の何れの日か之を忘れんやに因つて將に死に事ふる道を説かんとす。故に此の一句を擧げて以て上を承け下を起す。哭して偯せずとは、哭は哀む聲なり。吳子曰く偯は哭聲從容として餘あるなりと。禮記問傳に云く、大功の喪には三曲して偯すと。此の父母の喪は哀痛の極なり。故に其の哭するや氣竭きて息む。復餘聲なし。禮に容するなとは、禮は喪に居り行ふ所の禮法を謂ふ。容なしとは舉措進退脩飾して容儀をなすことなきを謂ふ。言文らずとは、言は言語なり。文らずとは事已むを得ざるあれば、則ち直其の言を致し、文飾を治擇し文辭を成さざるを謂ふ。美を服して安からずとは、美は美飾の衣服錦繡の類を謂ふ。安からずとは、哀戚して安からず、美衣を服するに忍びざるを謂ふ。樂を聞けども樂まずとは、平時樂を聞くとときは、則ち必ず樂む。

三曲すとは一たび聲を擧げて三折するなり。大功は親の喪の斬衰より輕し。故に偯するなり。



痛益深不樂。而耳不忍聞樂也。食旨不甘。旨味之美也。言平時食旨必甘美。今因哀戚太甚。食甘却不甘美。而口不忍甘旨味也。此哀戚之情。此指上文不儻等六句而言。哀悲哀也。戚憂也。痛也。情真心之發見。所謂人情也。此一句結上文以起下文聖人之制也。

三日而食。教民無以死傷生。毀不滅性。此聖人之政也。

三日而食。三日謂從親始死經三日也。食謂食粥也。吳子曰。親死水

今哀戚太甚しきに因つて、樂を聞けば却つて哀痛益、深くして樂しからず。而して耳樂を聞くに忍びざるを言ふ。旨きを食へども甘からずとは、旨きは味の美しきなり。平時旨きを食へば必ず甘美とす。今哀戚太甚しきに因つて甘きを食つて却つて甘美とせずして口旨味を甘しとするに忍びざるを言ふ。此哀戚の情なりとは、此は上文の儻せざる等の六句を指して言ふ。哀は悲哀なり。戚は憂なり、痛なり。情は真心の發見いはゆる人情なり。此の一句は上文を結びて以て下文聖人の制を起す。

三日にして食するは、民に死を以て生を傷ることなく、毀へども性を滅さざることを教ふ。此聖人の政なり。

三日にして食ふとは、三日は親始めて死するより三日を経るを謂ふ。食ふは粥を食ふを謂ふ。吳子曰く親死

漿不入口。三日乃食粥。疏云。記開傳稱。斬衰三日不食。此云三日而食者何。劉炫言。三日之后乃食。皆謂滿三日則食也。此一句舉聖人所制之禮法。記問喪所謂親始死。惻怛之心。痛疾之意。傷腎乾肝焦肺。水漿不入口。三日不舉火。故隣里爲之糜粥以飲食之是也。教民無以死傷生毀不滅性。教謂因本之教。民人也。死親之死也。生子之生也。傷害也。戕也。謂哀傷太甚而至死亡也。毀謂羸瘦而容色毀壞也。性天命之性也。滅性謂天性之明昏昧。猶火熄也。蓋子之身與性皆親之遺體也。故或哭死傷害遺體

して水漿口に入らず。三日にして乃ち粥を食ふと。疏に云く記の開傳に稱す、斬衰三日食はずと。こゝに三日にして食ふといふは何ぞや。劉炫が言ふ、三日の後乃ち食ふと。皆三日に滿つれば則ち食ふを謂ふなりと。此の一句聖人制する所の禮法を擧ぐ。記の問喪にいはゆる親始めて死し、惻怛の心、痛疾の意、腎を傷り肝を乾かし肺を焦す。水漿口に入らず。三日火を舉げず。故に隣里之が糜粥を爲つて以て之を飲食せしむと是なり。民に死を以て生を傷ることなく、毀へども性を滅さざることを教ふとは、教は本に因る教を謂ふ。民は人なり。死は親の死なり。生は子の生なり。傷は害なり、戕なり。哀傷太甚しくして死亡に至るを謂ふ。毀ふとは羸瘦して容色毀壞するを謂ふ。性は天命の性なり。性を滅すとは天性の明昏昧して猶火の熄むがごときを謂ふ。蓋し子の身と性と皆親の遺體な



之生。或毀瘠骨露見。而情勝而滅天命之性。則却以爲不孝。曲禮所謂居喪之禮。毀瘠不形。視聽不衰。不勝喪。乃比于不孝是也。此一句以明聖人立法之蘊。此聖人之政。此指上文禮法禮意而言。政因本之政也。與上文教字相照應。此句一以示喪禮者聖人中和之妙。而他人之非所及也。一以爲承上起下之語。而明全段皆是聖法也。

喪不過三年。示民有終也。爲之棺槨衣衾。而舉之。陳其篋簋。而哀戚之。擗踊哭泣。哀以送之。卜其宅兆。而安措之。爲之宗廟

り。故に或は死を哭して遺體の生を傷害し、或は毀瘠して骨露見し、而して情勝つて天命の性を滅すときは、則ち却つて以て不孝と爲す。曲禮にいはゆる喪に居るの禮は毀瘠すれども形さず、視聽衰へず。喪に勝へざるは乃ち不孝に比すと是なり。此の一句以て聖人立法の蘊を明かにせり。此聖人の政なりとは、此は上文の禮法禮意を指して言ふ。政は本に因る政なり。上文の教の字と相應應す。此の句一は以て喪禮は聖人中和の妙にして他人の及ぶ所に非ざるを示し、一は以て上を承け下を起す語となす。而して全段は皆これ聖法なるを明かにせり。

喪三年に過ぎざるは、民に終あることを示す。これが棺槨衣衾を爲つてこれを擧げ、其の篋簋を陳ねて之を哀戚す。擗踊哭泣、哀んで以て之を送り、其の宅兆を卜して之を安措す。これが

以鬼享之。春秋祭祀。以時思之。

宗廟を爲つて鬼を以て之を享り、春秋に祭祀して時を以て之を思ふ。

喪不過三年。不過謂哀痛未盡。而俯從也。此一句亦舉聖人所制之禮法。記所謂三年之喪。二十五月而畢。哀痛未盡。思慕未忘。然而服以是斷之是也。示民有終。示開示也。民人也。有者天然自有之意也。終謂萬物生死始終之終。言有生必有死。有始必有終。天命之本然。有形之所必有也。故雖孝子終身之憂無窮。而喪不可無終竟之期。是以聖人立中制。以開示民有天命必然之終期。而不可任私情也。卽不減性之意。所以明喪禮之本也。爲

喪三年に過ぎずとは、過ぎざるは哀痛未だ盡きざるも而も俯して從ふを謂ふ。此の一句も亦聖人制する所の禮法を擧ぐ。記のいはゆる三年の喪は二十五月にして畢る。哀痛未だ盡きず、思慕未だ忘れず。然り而して服は是を以て之を斷つといふ是なり。民に終あるを示すとは、示すは開示するなり。民は人なり。有りとは天然に自ら有る意。終とは萬物の生死始終の終を謂ふ。言ふこゝろは生あれば必ず死あり、始あれば必ず終あるは、天命の本然、有形の必ずある所なり。故に孝子終身の憂窮なしと雖も、而も喪は終竟の期なかるべからず。是を以て聖人中制を立て、以て民に天命必然の終期あつて、私情に任ずべからざるを開示す。卽ち性を減さざる意。喪禮の本を明すゆゑなり。之が

記のいはゆる、禮記三年間篇の語。



之棺槨衣衾而舉之。爲造也。棺說文關也。所以掩屍也。槨外棺也。衣謂襲與大小斂之衣也。衾謂單被。覆尸荐尸所用也。舉謂舉屍內於棺也。之指親屍而言。吳子曰。尸之外衣。衣之外衾。以襲以斂。衾之外棺。棺之外槨。以斂以殯。陳其簠簋而哀戚之。陳列也。其指朝夕朔望之奠而言。簠簋祭器也。之指親不在而言。吳子曰。此言朝夕朔望之奠。簠盛稻梁器。外方內圓。簋盛黍稷器。外圓內方。按士喪禮。朝夕奠脯醢而已。盛以籩豆。朔月殷奠。始有黍稷。盛以瓦敦。卿大夫祭禮少牢饋食。亦止用敦盛黍稷。

棺槨衣衾を爲つて之を舉ぐとは、爲るは造るなり。棺は説文に關なり、屍を掩ふゆゑなりと。槨は外棺なり。衣は襲と大小斂の衣とを謂ふ。衾は單被を謂ふ。尸を覆ひ尸に荐くに用ふる所なり。舉ぐとは屍を擧げて棺に内るゝを謂ふ。之は親の屍を指して言ふ。吳子曰く尸の外は衣、衣の外は衾、以て襲し以て斂す。衾の外は棺、棺の外は槨、以て斂し以て殯すと。其の簠簋を陳ねて之を哀戚すとは、陳は列なり。其のとは朝夕朔望の奠を指して言ふ。簠簋は祭器なり。之は親在さざるを指して言ふ。吳子曰く此は朝夕朔望の奠を言ふ。簠は稻梁を盛る器、外は方に内は圓し。簋は黍稷を盛る器にして外は圓く内は方なり。按するに士喪禮に朝夕の奠は脯醢のみ。盛るに籩豆を以てす。朔月の殷奠に始めて黍稷あり。盛るに瓦敦を以てす。卿大夫の祭禮少牢饋食にも亦た、敦を用て黍稷を盛る。公食

襲と大小斂の衣、尸に着せしむるを襲といふ。襲はめぐらす意、衣を以て全部を覆ふ。斂衣は大斂小斂の時に着せしむる衣。小斂は死者の衣を着かへしめ、大斂は棺に入れるときに衣を着せしむるをいふ。

士喪禮、少牢饋食禮、公食大夫禮ともに儀禮の篇名。

以公食大夫禮推之。竊意。天子諸侯之殷奠。乃備黍稷稻粱。而器用簠簋。此經所云。蓋舉上而言之也。擗踊哭泣。哀以送之。擗以手擊胸也。踊以足躑地也。註曰。男踊女擗。疏云。按問喪云。在牀曰尸。在棺曰柩。動尸舉柩。哭踊無數。惻怛之心。痛疾之意。悲哀志慙氣盛。故袒而踊之。婦人不宜袒。故發胸擊心爵踊。殷々田々。如壞牆然。則是女質。不宜極踊。故以擗言之。據此女既有踊。則男亦有擗。是互文也。哭者口有聲。泣者目有淚也。擗踊哭泣者。惻怛痛疾之情。發見于形體者也。哀謂哀其形不返

大夫の禮を以て之を推し、竊かに意ふに、天子諸侯の殷奠にして、乃ち黍稷稻粱を備へて、器は簠簋を用ふ。此の經にいふ所は、蓋し上を擧げて之を言へるならんと。擗踊哭泣哀んで以て之を送るとは、擗は手を以て胸を撃つなり。踊は足を以て地に躑つなり。註に曰く男は踊し女は擗すと。疏に云く按するに問喪に云く牀に在るを尸といひ、棺に在るを柩といふ。尸を動かして柩に擧げ、哭踊すること數なし。惻怛の心、痛疾の意、悲哀して志慙え氣盛なり。故に袒いて之を踊す。婦人は宜しく袒ぐべからず。故に胸を發き心を撃ちて爵踊す。殷々田々として壞牆の如く然りと。則ちこれ女の質は宜しく踊を極むべからず。故に擗を以て之を言ふ。此の女既に踊あるに據れば、則ち男も亦擗あり。是互文なり。哭とは口に聲あるなり。泣とは目に涙あるなり。擗踊哭泣するは惻怛痛疾の情形體に發

注に曰く、御註をさす。問喪、禮記の篇名。

爵踊す、雀の踊る如くするなり。殷々田々、共に哭聲を形容する語。



也。之指柩而言送之。謂送形而往葬地也。卜其它兆而安措之。卜灼龜以視吉凶也。其指所葬而言。宅墓穴也。兆塋域也。措置也。安措謂無地風水泉樹根蟲蟻等患。及爲人所發也。之指柩而言。吳子曰。將置柩于其處。必乘生氣無地風水泉沙礫樹根螻蟻之屬。及他日不爲城郭溝地道路。然後安。卜者決之於神也。不卜則擇之以人。葬書備言其術之理。可稽焉。中州土厚水深。不擇猶可。偏方土薄水淺。凡地不皆可葬。苟非其地。尸柩之朽腐敗壞至速。與舉而委之于壑同。孝子之心忍也。先擇後卜。尤爲謹

見する者なり。哀むは其の形の返らざるを哀むを謂ふ。之は柩を指して言ふ。之を送るとは形を送つて葬地に往くを謂ふ。其の宅兆を卜して之を安措すとは、トは龜を灼いて以て吉凶を視るなり。其のは葬る所を指して言ふ。宅は墓穴なり。兆は塋域なり。措は置くなり。安措すとは地風水泉樹根蟲蟻等の患及び人に發かるゝことなきを謂ふ。之は柩を指して言ふ。吳子曰く將に柩を其の處に置かんとすれば、必ず生氣地風水泉沙礫樹根螻蟻の屬なく、及び他日城郭溝地道路とならざるに乗じて、然る後に安んず。トとは之を神に決するなり。トせざる時は則ち之を擇ぶに人を以てす。葬書に備に其の術の理を言ふ、積ふ可し。中州は土厚く水深ければ擇ばざるも猶可なり。偏方は土薄く水淺し。凡そ地皆は葬る可からず。苟も其の地に非ざれば尸柩の朽腐敗壞至つて速かなり。舉げて之を壑

塋域、はかば。

重。所謂謀及乃心。謀及士民。而後謀及卜筮也。按士喪禮。筮宅卜日。大夫以上。則葬日與宅兆皆用龜卜。或亦用筮。此云卜。蓋通言之。爲之宗廟以鬼享之。爲謂作造及脩飾也。按王制祭法。官師已上皆立廟。庶士庶人無廟。祭於寢。此舉宗廟。以包祭於寢者也。以鬼猶言以事鬼神之禮也。享者祭祀人鬼之名。之指親精神而言。吳子曰。初喪至葬。有奠無祭。蓋猶以人禮事之。既葬迎精而反。乃以虞祭易奠。卒哭而耐于祖。喪畢而遷于廟。始純以鬼禮事之。春秋祭祀以時思之。春秋謂四時。春陽之始。夏陽

に委くと同じ。孝子の心忍びんや。先づ擇んで後にトす。尤も謹重と爲す。いはゆる謀ること乃が心に及ほし、謀ること士民に及ほし、しかる後に謀ることト筮に及ほす。士喪禮を按ずるに宅を筮し日をトす。大夫以上は則ち葬日と宅兆と皆龜トを用ひ、或は亦筮を用ふ。こゝにトすといへるは蓋し之を通言するのみと。之が宗廟を爲つて鬼を以て之を享るとは、爲るは作造と脩飾とを謂ふ。王制祭法を按ずるに官師已上は皆廟を立つ。庶士庶人は廟無く寢に祭る。こゝに宗廟を舉げて以て寢に祭る者を包ぬ。鬼を以てとは猶鬼神に事ふる禮を以てすと言はんがごとし。享るとは人鬼を祭祀する名なり。之は親の精神を指して言ふ。吳子曰く初喪より葬に至るまで奠ありて祭なし。蓋し猶人の禮を以て之に事ふ。既に葬り精を迎へて反り、乃ち虞祭を以て奠に易ふ。卒哭して祖に耐し、喪畢つて廟に遷

謀ること乃が心に及ほし云々、尙書洪範の語。

虞祭、虞は安なり。葬式を終へて其の靈を安んずる爲に行ふ祭名。







其旨至哉妙哉。事親即孝行也。終盡也。言先王聖人孝子之孝行德業。盡此而無遺也。自生事愛敬至于此五句。孝經一部之結語也。必勿作喪親一章結語講也。

の親に事ふること終りぬとは、孝子は即ち先王明王聖人君子是なり。始は先王を以て之を起し、終は孝子を以て之を結ぶ。其の旨至れるかな、妙なるかな。親に事ふるは即ち孝行なり。終るは盡くるなり。先王聖人孝子の孝行德業此に盡きて遺すなきを言ふ。生けるには事へて愛敬すより此に至る五句は孝經一部の結語なり。必ず親に喪する一章の結語となして講ずることなかれ。

本定 孝經啓蒙 畢

昭和十七年 二月 一日印刷  
昭和十七年 三月 二十七日發行



本定 孝經啓蒙  
定價 金壹圓六拾錢  
外地定價 金壹圓七拾五錢

著者 加藤 盛一  
發行者 細江 敏  
印刷者 須磨 勘兵衛  
東京市澁谷區代々木山谷町二〇七  
京都市下京區北小路通新町西入

發行所

東京市澁谷區代々木山谷町二〇七

天農堂

配給元

東京市神田區淡路町三丁目九番地

日本出版配給株式會社

振替口座東京一六二五四番



419  
87



終